
転生したけど引きこもります。

こ～ふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生したけど引きこもります。

【Nコード】

N7095Y

【作者名】

こゝふ

【あらすじ】

死んで異世界に転生することになったミコト。ヴァンパイアになったのはいいけどまさかの引きこもり種族だった事実にうちのめされつつ、仲間と陽光が届かないダンジョンでモンスター退治に勤しんだり、遮光カーテンを閉めた暗い室内で裁縫したり。引きこもり街道まっしぐらにがんばります。（作者は初心者です、誤字脱字があると思いますので見つけたら教えてくださると嬉しいです。また第一話の前書きは必ずお読みくださいますようお願い致します。）

ミコトの学習ノート 世界編（前書き）

読んでおくと楽かもしれない。

（追加事項があったら随時更新）

ミコトの学習ノート 世界編

【世界について】

半円球のドームのような形をしており、「世界の端」と呼ばれる壁で囲まれている。

大陸は2つ。

世界の東にフィルレイ大陸、西にノーム大陸。

2つの大陸は世界の端にそれぞれ接していて、大陸間の交易は皆無に近い。

理由は間にある海を渡ることが難しいから。

フィルレイ大陸には国が11個あってここ50年は小競り合いはあっても戦争はない。

フィルレイ大陸最大の国はルドンで大陸の3割を占めている。

【ルドンについて】

信仰は明星と黄昏の双神「フィラ」と「リュウレ」。

王都を囲むように6の領がある。

冒険者ギルドと神官ギルドの発祥国で小規模のダンジョンが多数存在している。

王制ではあるけれど世襲制ではなく、6領の領主から選ばれる。

【ギルドについて】

一般的に15歳から20歳の独り立ちした者はいずれかのギルドに登録しなければいけない。

20歳を超えて登録しないものやある一定の条件を満たしてしまつた者は、野党または特殊ギルド「奴隷ギルド」に登録される。

【冒険者ギルドについて】

登録資格は15歳以上。

支部数は二番目に多い。

税金は年20000セル。

ありとあらゆる依頼が集まりやすい、通称「何でも屋」。

設定可能職業は特になしだか必然的に武器職業となっている。

発祥地はルドン。

【魔術師ギルドについて】

登録資格は15歳以上で魔術が使えること。

支部数は最小。

税金は年50000セル。

個人依頼はほとんどなく、大半が国からの依頼。また、登録している者の8割が国定魔術師で各国の王宮勤めなのが特徴。

設定可能職業は魔術師のみ。

発祥地はルドンの北にある国サイロン。

【神官ギルドについて】

登録資格は15歳以上で医術（回復術）もしくは神術（予知や神託）が使えるもの。

支部数は三番目。

税金は年25000セル。

依頼は祭事関係や治癒関係のみ。信仰の関係上なのか上層部の内部衝突が多い。

設定可能職業は医術士、神術士。

発祥地はルドン。

【職人ギルドについて】

登録資格は15歳以上で各職業従事者の推薦を受けたもののみで、登録時に10000セル必要。

支部数は最大である街にある。

税金は最低10000セル以上で年収の2割と変動制。

依頼は専門的なものが多い。また店を構えるのにはギルドの許可が必要で無許可が判明するとギルドを追放される。

設定可能職業は鍛冶士（武器や装備品を作製）、調理士（料理や薬を作製）、建築士（建造物の作製）、会計士（販売店での販売買取）、製造士（武器・装備、料理・薬以外の加工品製造）、農作士（農家）、飼育士（酪農家）。

発祥地は不明。

【奴隷ギルドについて】

20歳を過ぎてもギルドに登録出来なかったもの、税金を納められなかったもの、ギルドを追放されたもの、罪を犯したものが登録させられる。

登録されたものは「隷属の首輪」を付けられ、労働力を求める者に買われるまで教育及び訓練を受け、労働を強いられる。

税金は年10000セルで奴隷所有者が払う、払えなかったら所有者もろとも奴隷ギルドに再登録される。

奴隷でなくなるには罰金及び奴隷でいた年数分の税金を払い他ギルドに登録資格を得たときのみ。

設定可能職業は奴隷。

発祥地は不明。

【職業取得について】

各ギルドで条件を満たして承認されると取得できる。

武器職業：所持している武器によって変わる。全系統武器のレベルが60を越えると武術士という職業になるらしい。

魔術師：生まれ持った才能により魔術を使うとなれる。

医術士：神殿に修行に入り医術を取得したらなれる。

神術士：生まれ持った才能で、予知か神託を受けれる人が神殿に修行に入り15歳を超えると貰える。

職人職業：各職業従事者に修行をつけてもらい、その人から推薦をもらう。

【土地・建物購入】

土地は領主もしくは地主に依頼。建物は建築士に依頼。建物付き土地の購入は領主もしくは地主に依頼のみ。

【奴隷の購入】

奴隷ギルドで各奴隷の能力価格と所属年数分の税金の2割を払うことで購入できる。

購入した奴隷は個人所属奴隷となり、所有者が死亡した場合奴隷も死亡する。

【ダンジョンについて】

入場にはギルドカードが必要、ただしパーティーの場合リーダーが持っていれば良い。

モンスターはいずれもフィールドに居るものより凶暴。

宝箱と呼ばれる物がまれに発見されるが出現条件は不明。

最終ボスを倒すとそのダンジョンは消える。

現在の確認ダンジョン数は268。

最大ダンジョンはルドンの西にある「銀樹のダンジョン」。

【モンスターについて】

世界に溜まる負の力が生み出したもの。
フィールドに居るモンスターの中には穏和（襲ってこない）なものもある。

倒すと世界に還りドロップ品を落とすことがある。

【ヴァンパイア族について】

世界の夜が産み出した希少種で精霊に近いとされているが、確認個体数があまりにも少ないため不明。

出生の法則も不明だが必ずある程度は成長した姿で生まれるとされている。

陽光下ではその身体能力の60%が発揮できないと言われており、直接陽光を浴びるとおよそ3分間で1割、日陰でも6分で1割の体力が削られる。

陽光の当たらないダンジョンや夜における身体能力は、おそらく全種族中トップと思われる。

暗視能力があるとおもわれる。

不老で長寿で寿命は1000年以上とおもわれるが、繁殖力はなのか極端に弱いため、ヴァンパイア族が子を成したという話は聞かない。

現在確認個体数8人。

【人間について】

世界でもっとも繁殖している種族。

身体能力は普通ながら繁殖力と適応能力が高い。

寿命は80年ほどで特定の発情期というものがない。
他種族との子をなすこともできる唯一の種族。

【エルフについて】

別名「賢き種族」。

魔術才能を有したものを多く排出している。

寿命は600年ぐらいで繁殖力は低い。

同族意識が高く集団で集落を構成することが多い。

【ドワーフについて】

器用さは全種族中トップと言われており、戦闘能力も高いものが多い。

寿命は500年ぐらいで繁殖力は普通。

個人主義で同族で集落を形成することはほとんど無い。

【ドラゴイドについて】

戦闘能力が高く物理攻撃能力は全種族中トップ。

寿命は800年ぐらいで繁殖力は低いが多産。

主従思考が強い種族で大抵のものが主を決めていると言われる。

自ら奴隷になるものが多い。

【ワーキャットについて】

敏捷性が高い種族。

寿命は80年ぐらい繁殖力は普通で多産。

【ワーウルフについて】

嗅覚や索敵力が高く戦闘力もなかなかにある種族。

寿命は80年ぐらいで繁殖力は普通で多産。

【ラビトニアンについて】

戦闘能力は低いが器用で穏和な種族。

寿命は60年ぐらいで繁殖力が高く多産だが乳児の死亡率が高い。

【サン克蘭族について】

世界の朝が産み出した希少種で精霊に近いとされているが、確認個体数があまりにも少ないため不明。

出生の法則も不明だが必ずある程度は成長した姿で生まれるとされている。

陽光の当たらない場所ではその身体能力の60%が発揮できないと言われている。

陽光下での身体能力は、おそらく全種族中トップと思われる。

不老で長寿で寿命は1000年以上と言われているが不明。

繁殖能力が低くサン克蘭が子を成した記録はない。

ヴァンパイア族の対の存在と言われている。

現在の確認個体数21人

【精霊について】

生態および誕生についてほぼ不明。

世界が産み出したとも進化の果てともいわれている。

形状は様々でダンジョンの最終ボスとして存在するものもいるらしい。

【個人的メモ】

銅貨 : 1セル

青銅貨 : 10セル

銀貨 : 100セル

金貨	：	1000セル
白金貨	：	10000セル

ミコトの学習ノート 世界編（後書き）

ホントは8話でいれる予定だったけど、追記しやすいようにしてみましたw

ミコトの学習ノート 人物・他編（前書き）

要るか要らないか微妙だけど作者にはとっても大事なところですよ
、
（*）

ミコトの学習ノート 人物・他編

■登場人物紹介（ステータスは登場時のもの）。

【ミコト】カガリ ヴアンパイア族 15歳 女 レベル1

属性：闇、雷、水

職業：槍術士レベル1、魔術士レベル1

控え職業：なし

称号：なし

所属：なし

所属ギルド：なし↓冒険者ギルド

所持奴隷：なし

装備：ロンギヌス、回復の指輪、アイテムボックス腕輪型

常時スキル：暗視

任意スキル：鑑定、テレポート、闇魔術、水魔術、雷魔術、槍技能

特殊能力：取得経験値八倍、成長率八割増加、ステータス再振り、

第三職業

ステータス（<>内はレベル上昇による成長値）：

体力240 20

魔力240 20

物理攻撃13 1.2

物理防御14 1.1

魔法攻撃11 1.2

魔法防御10 1.1

速度14 1.2

運18 1.1

黒髪・黒目、148?、儚い系美少女、心の中はお喋りだが口数は少な目。

界渡り者（享年36歳）】

【ナパーク 人間族 43歳 男 レベル73

属性：風

職業：剣術士レベル66

控え職業：槍術士レベル58、拳術士レベル61、弓術士レベル52、棒術士レベル55、会計士レベル4

称号：冒険者ギルドメロセフ支部長、双牙

所属：なし

所属ギルド：冒険者ギルド

所持奴隷：なし

装備：クリス×2、力の指輪、銀鎧、アイテムボックス腕輪型

常時スキル：なし

任意スキル：剣術技能

、弓術技能

、会計技

、槍術技能

、拳術技能

特殊能力：作業効率四倍

ステータス（<>内はレベル上昇による成長値）：

体力830 10

魔力319 3

物理攻撃81 1

物理防御78 1

魔法攻撃9 0.1

魔法防御55 0.7

速度87 1.1

運420.5

茶髪・青目、192?、一見地味目の普通の人だが、かつては国にその名を轟かせた天才と誉れ高き猛者。とあるモンスターとの戦

いで利き腕に怪我を追った時の後遺症の為あっさり現役を引退した。
我が道を行く世話焼き人でミコトの一時的保護者。」

【リアマ エルフクオーター 人間族 59歳 女 レベル68

属性：水

職業：神術士レベル23

控え職業：医術士レベル2、水魔術レベル2、剣術士レベル2、拳
術士レベル2、弓術士レベル2、調理士レベル2、会計士レベル2

称号：神官ギルドメロセフ支部長、受託者

所属：なし

所属ギルド：神官ギルド

所持奴隷：なし

装備：グラングリモア、知恵の腕輪、銀系の鎧、アイテムボックス

スペンダント型

常時スキル：索敵

任意スキル：医術技能、水魔術、剣術技能、拳術技能、弓術技能、

調理技能、会計技能

特殊能力：受託

ステータス（<>内はレベル上昇による成長値）：

体力6448

魔力83214

物理攻撃380.5

物理防御450.6

魔法攻撃811.1

魔法防御721

速度650.9

運520.7

金髪・緑目、173?、エルフの血が混ざっているため老化がゆ

つくり。かつてはナパークと共に国に名を轟かせていた。
惚れた弱味でナパークに振り回される苦労人でミコトの一時的保
護者】

【ムウ ワーウルフ族 35歳 男 レベル51

職業：剣術士42

称号：冒険者ギルドメロセフ支部長秘書官

ミコトの感想「忠犬っぽい」】

【管理人様 色々不明 多分男
第107805世界の管理人

ミコトの感想「もうちょっと色々知識とかほしかったです」
対する管理人の回答「お主の場合はあれで色々限界じゃ」】

■装備品補足

【ロングヌス 槍レベル

所有者 ミコト〃力ガリ

ダメージ+500%、致命打率+25%、集中力+50%、状態
自動回復

「爆ぜよ、滅つせよ、そして再生せよ！」】

【回復の指輪 指輪レベル

状態異常耐性60%、体力常時回復6%、魔力常時回復6%（回復速度は3分間）】

【クリス 剣レベル

体力+20%、速度+25%、致命打率+3%】

【力の指輪 指輪レベル

物理攻撃+60%】

【グラングリモア 魔導書レベル

所有者 リアマ

スキル治癒、スキル水魔術、スキル風魔術、スキル火魔術、スキル地魔術、スキル雷魔術、魔力+50%、魔法攻撃+25%

「我と契約せしものに偉大なる魔術をあたえん」】

【知恵の腕輪 腕輪レベル

魔法攻撃+20%、魔法防御+20%、状態異常耐性20%】

ミコトの学習ノート 人物・他編（後書き）

人物は話が進むにつれて追加予定です。

第一話「アナタ ハ シボウ シマシタ」(前書き)

はじめまして、この度はお読みいただきありがとうございます。

当小説は蘇我捨恥様の「異世界迷宮で奴隷ハーレムを」に作者がインスピレーションを受け執筆したものです。

従っていくつか類似する設定が出てくる場合がございますことをご了承ください。

また、蘇我捨恥様へ事情を説明しており、掲載について今のところ問題なしと許可をいただいておりますが、削除してほしいといわれた場合は掲載を取り止めることになっております。

以上のことを踏まえた上で稚拙な文章を読んでくださるという方のみご購入ください。

第一話【アナタ ハ シボウ シマシタ】

白い空間と言うしかない世界で、私は独りぼつんと呆けていた。

【アナタ ハ シボウ シマシタ ツギ ノ セカイ ヲ センタ
ク シテ クダサイ】

目の前に浮かぶ文字と数多の選択肢っぽい単語がここは夢なんだろうか？と思うが…。

【アナタ ハ シボウ シマシタ】

その言葉に思い出されるのはこの空間に来る前の出来事。
ああ、死んだなって思ったつけ……。

って！ なに素直に受け止めてるんだ私っ！
どう考えても夢だったの！

小説の読みすぎかなあ、死んで異世界に！とかテンプレすぎるわ。

うん、夢だと思ったら気が楽になってきた。

【アナタ ハ シボウ シマシタ ツギ ノ セカイ ヲ センタ
ク シテ クダサイ】

はいはい、選択しますよ。

【ジンシュ ノ センタク ニシュ エランデ クダサイ】

人間種と亜人種と魔人種に翼人種、あとは…なにこれ、機人種？？
よくわかんないなあ。

とりあえず、人間と亜人にしとこう。

魔人も捨てがいけどねえ、転生種族を選べるならヴァンパイアがい
いんだけど。

ヴァンパイアって亜人？魔人？

うーん…。

【セツテイ カンリヨウ センテイ ヲ ジツコウ】

え…。

時間制限？それとも選んだ瞬間決定？！

【コンケツ ヲ ノゾミ マスカ？】

コンケツ？………混血か。

もちろん望むに決まってる！

【センテイ ヲ ジツコウ】

【アジン ノ キホン シュゾク ヲ エランデ クダサイ】

めんど…いやいや、楽しくなってきたかも？

並んだ種族を一通り見る。

うん、ファンタジーだね、なにこの妖精種って。
麒麟とかドラゴンに巨人や小人もあるのかあ。
多種多様だ。

それぞれの後ろに　がくつついてるけど、レア度？
うー、悩む。

オーソドックスに、エルフとドワーフ。

あとは……犬と猫と竜、んー狸と狐に兎でしょ。

ずっと下の方まで見ていくと　5のランダムってのがある。
よくわからないけどこれも選んじゃえ。

んー、こんなものかなあ？

【セツテイ ヲ カンリヨウ センテイ ヲ ジツコウ】

【ヒカリ ト ヤミ ノ タイリツ ヲ ノゾミ マスカ？】

望まない。

戦う意味がわかんない。

闇⇨悪、光⇨正義の図式嫌いだし。

【センテイ ヲ ジツコウ】

【ブンカ ト シンコウ スウ ヲ センタク シテクダサイ】

ブンカは文化として。

進行数？いや、侵攻かな？親交かもなあ。

よくわかんない。

文化12でシンコウは6ぐらい？

【セッテイ ヲ カンリヨウ センテイ ジツコウ】

【マホウ キジュツ ノ レベル ヲ センタク シテクダサイ】

むう、あんまり魔法で片がついちゃうと私がついていけなさそうだから…。

2ぐらい。

【カガク ギジュツ ノ レベル ヲ センタク シテクダサイ】

魔法が2だからこっちは1かな。

0だと死ねそうだし、私が！

ファンタジーなら魔法優先だね。

【セッテイ ヲ カンリヨウ センテイ ヲ ジツコウ】

【コクスウ ヲ センタク シテクダサイ】

どーでもいい。

覚えれそうな数で20以下つと。

【セッテイ ヲ カンリヨウ センテイ ヲ ジツコウ】

【センソウ ヒンド ヲ センタク シテクダサイ】

え、平和主義なのでないほうがいいけど。

でもファンタジーに戦争はつきものだから……ここは思いきって3！

【セッテイ ヲ カンリヨウ センテイ ヲ ジッコウ】

【マモノ ノ ソンザイ ヲ ノゾミ マスカ？】

もちろんだとも！！

ファンタジーといえば魔物ですからね！！

【シュツゲン ヒンド ヲ センタク シテクダサイ】

えっと、エンカウント数？

それとも見える範囲の数？

まあ、7ぐらい？

【ダンジョン タイプ フィールド タイプ ヲ センタク シテ
クダサイ】

両方。

即答するけど両方。

これは譲れない！

【セッテイ ヲ カンリヨウ センテイ ヲ ジッコウ】

【セカイ ノ セッテイ ヲ カンリヨウ シマシタ】

【アナタ ノ セッテイ ヲ オコナッテ クダサイ】

その文字と共に目の前の白い空間に人形が現れる。
これはなんぞ？

近づいてみると無表情の人形の横にいくつもの項目があった。
まずは性別、これは女でOK。
年齢も……青春をもう一度！ってことで15歳かな。

そこまで決定したら人形が子供サイズになった。

次は種族かなあ。

今は人間族だけど……別なものにはならないのかな？
って思ったら変わった。

今度はエルフだ、………そういえばランダムってのなんだったんだろ
う？

見てみたいなあ。

って思ったことが私の最初の戦いでした。

………

………

………

………うー、出てこない。

やっぱり はレア度かなあ？

…

………

………

………疲れてきたあ

今何回目？

さつきから人間と獣系しか出てこないし！！

…

……

……

……

……ん？

【亜人種 ヴアンパイア

】

おっおっおー！

キタンじゃない？

いやキテるでしょっ！

ヴアンパイアとかマジ素敵っ！！

やっぱり亜人カテゴリーだったかヴアンパイア！

モチロンこれに決定！

誰がなんと言おうとも決定！

決めたら人形がきつい感じの小生意気そうな少女になった。

………顔が気に入らない！！

そう思ってほっぺをつついたらへこみました。

点ではなく面で！

びっくりして思わずその体勢で固まったのは仕方がないよね？！

検証の結果、顔の造形や髪型は弄れるようでした。

うん、なんか今いじりすぎてちょっとしたホラーだけど必死に直そう。

目指すは儚い系のお人形さんのような美少女!!

...

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

こんな感じ？

腰まである黒髪ストレート、前髪はワンレングスで目は黒。

身長は150cmぐらいの小柄。

胸はまあ程よくCぐらい？

細身で顔はヴァンパイアのデフォなのかきつい顔が基本設定だった。まあ、いじりにいじって二重のパッチリ目、だけど全体的に儚い系人形だからだろうけど無表情がコワイ。

まあ、なかなか満足のいく美少女に仕上がったからこれで決定つと。

【セッテイ ヲ カンリヨウ センテイ ヲ ジッコウ】

【ポイント ヲ センタク シテクダサイ】

敢えて言おう、まだ続くのか!!

文字の下に現れたのはゲームのスキル画面みたいなもの。
ポイントは種族選択のように選ぶ度に変わっていく。
2桁っぽいから99までかな？

… 54、もうちょっと

…
… 18 論外

…
… 25 まだまだ

…
…
… さつきから20〜35あたりをいつたりきたり。
… さつきの54で妥協すべきだったかな？
… ただひたすらに選り直す。

…
…
…
…
…
…
…
…
…
…
…
…

何回選りなおしたか麻痺した項目の前の選り肢が光った。

正確には数字が光った。

【ボーナスポイント 99】

ふっ勝ったぜっ！ もちろん迷わず確定する。

ガッツポーズをとってふと気がつく、いつこの夢から覚めるんだろう？

第一話「アナタ ハ シボウ シマシタ」(後書き)

3話まで連続で投稿します。

第二話「とっろでっねって夢ですよね」(前書き)

いまだに異世界にたどり着いてない件…。

第二話「ところでこれって夢ですよね」

いい加減目が覚めてもいいんじゃない？つてぐらいには時間が経ってる気がする。

まさか本気で死後の世界？

いや、ないない。

ない、よねえ？

【ポイント ヲ フリワケテ クダサイ】

相変わらず無機質で読みづらい文字が浮かぶ。

それにしてもどんどんゲームっぽくなっていくなあ。

ちよつとポイントで選べるのが普通なのかチートなのか微妙だけど。しかし、なんか隙間多いなあ。

上から下までざつと見てみると暗視の部分が白くなってる。

選べないってことかな？

他は……。

取得経験値二倍（3P）と成長率二割増加（3P）は必須だよね。

選ぶと取得経験値四倍（6P）と成長率四割増加（6P）の項目がある。

さらにそれぞれを選ぶと取得経験値八倍（12P）と成長率八割増

加（12P）が出てきたので選んでみる。

それぞれの項目が灰色になってそれ以上は出なかった。

これで42Pも使うのかぁ。

あとは……ん？

なにこのボーナスポイント再振り（12P）って？

んーあれか、ネットゲとかにあるステータス再振りみたいな？
よし、迷わず選択。

これで54P使用、残りが45Pつと。

あと使えそうなのは…、鑑定（3P）

テレポート（3P）

第二ジョブ設定（3P）、第三ジョブ設定（6P）、第四ジョブ設定（12P）

残り18P。

うーん、ジョブ設定削ろう。

第四ジョブ設定（12P）無くして、残り30P。

ボーナス武器・槍1（3P）、ボーナス武器・槍2（6P）、ボーナス武器・槍3（12P）

ボーナス装備・指輪1（3P）、ボーナス装備・指輪2（6P）

これで使い切ったかあ。

よし、決定っと。

【セッテイ ヲ スベテ カンリヨウ シマシタ】

その文字に満足する。

時間かけたし感慨深いなあ。

んで、どうなるんだろう？

「その設定で異世界行くに決まっておる」

.....は？

「この度は我が管理下の第107805世界を選んでくれて感謝する」

だれ、この人。

突然目の前に現れた人を凝視する。

「我は世界の管理人じゃ、おぬしを我が管理世界に導こう」

あー、テンプレの神様こないと思ったらここに来たのかあ。

「神ではなく管理人じゃがな」

…考えてることが読まれてるパターンですね、わかります。

「うむ、理解が早くて助かるの」

とりあえずお約束の状況説明を希望します。

「おぬしは死亡した。そして今行っておった世界選択に失格せずに
我が管理世界を選択した、故に連れて行くのじゃ」

失格したらどうなるのか非常に気になるんですけど…。

「失格というのは、世界選択において該当世界が空いていない、もしくは技能レベルが最大となった世界選択をした場合は元の世界の
輪廻に戻るのじゃ」

空いていないって言う意味も分からないんだけど、あとなんで技能
レベルが最大だとダメなの？

「空きは空きじゃ、異世界より呼び込まれるのは世界ごとに決まっ
ておるからのう。」

技能レベルが最大の世界は飽和世界となつて、基本的に滅びるから
じゃ」

へえ…、ところでこれって夢ですよね。

「夢ではない」

………ねーよ。

ないない、妄想おつたよ。

「だから現実じゃ、おぬしの場合今から行く世界で死んだら魂がおそらく消滅する」

「なんですか！

「ヴァンパイアは不老長寿、繁殖力が酷く乏しいゆえに次代をなかなかつなげられぬのじゃ」

「だから？

「お主の血縁がおらぬのでは魂は世界に耐えられずに消滅する」

「なんですか！！

「本来、魂とは血によって世界に留められているものじゃ。界渡りとして転生するゆえお主と血の繋がる者…つまりところの血縁者はおらぬ」

「……すみません、召喚じゃなくて転生なら両親とか親類いるんじゃないの？

「おらぬ、これから行く世界ではヴァンパイアは世界が生み出すものとなっており、したがってお主も世界が産み出すことになる。ちなみに赤子の時期はなく先ほど作成した姿で転生となる」

「さすがレア度 だねっ！

「他にもヴァンパイアっているの？

「ふむ…累計で500人ほどの」

少なっ！ 世界の広さと人口知らないけどね。

「まあそれはいつてからの楽しみじゃ」

ふーん。

で、いつ夢から覚めるんだろう？

「だから現実じゃ、おぬしは死んでおる」

じゃあ死因はなんだ！

心臓発作か？ 脳梗塞か？！

「銃弾で頭を打ち抜かれて死んだのじゃ」

なんでさ！

「流れ弾と言うものじゃな」

最悪だっ！

死因最悪すぎるだろ！！

…

…

…

…

…

…

…はあ。

「諦めがついたかの」

まあ……、ちょっと心残りがありますが。

「では行こうかの、おぬしの名を名乗るがよい」

「果^{かがり}雁^{かり}みこと、ついでに享年36歳」

「うむ、享年は別に要らんのだが」

なんとなく言ってみました。

「まあよかるう」

うん、気にしたら負けってやつです。

「世界とおぬしを繋げたぞ、我から特別に行く世界の10歳ほどの幼子が知ってる常識を与えよう」

まじかつ！

神様優しいね。

「神ではなく管理人じゃ」

オッケー、管理人様優しいねっ！

「では、行ってこい」

行ってきます。

第二話「とじろでいねって夢ですよね」(後書き)

あと一話投稿して今日の分は終わりです。

【閑話】 管理人から見た世界選択（前書き）

内容薄くてごめんなさい

【閑話】 管理人から見た世界選択

【界渡りが現れました 世界設定完了 該当世界候補の管理人は至急お集まりください】

脳内に響いた天啓にその場にいた管理人全員が顔をしかめる。

若い管理人が文句を言いながらも移動を開始する中、年配の管理人は動かない者が多い。

彼らは界渡りの枠が埋まっている世界の管理人なのだ。

界渡りが世界に降り立つ数は世界ごとに決まっている。

中には万を超える世界もあればたった一人という世界もある。

管理人に預けられる世界は大体一人千ほどといわれている。

「やれやれ、若い者は面倒ごとが嫌いな物が多いのう」

「そういうおぬしも面倒ごとはきらいであろう」

中堅と思われる管理人がのんきに界渡りを見守る。

「世界の設定で失格しなかったのはともかくとして、亜人族のレア種【ヴァンパイア】が住まう世界か」

「魔人種【ヴァンパイア】ならともかく、希なことだな」

「ともあれこれで世界は一気に絞り込まれたんじゃないか？」

「【亜人族 ヴァンパイア種】を有していながら文明度が3しかないからな、奇運のもちぬしか？」

「粘り強いだけかもしれんぞ？」

もちろん最初の世界設定にもよるが、基本的に十万分の一ぐらいの確率でしかヴァンパイアは出ないといわれている。

なぜなら【ヴァンパイア】は魔人種か人の手によって産み出されている…、つまり技術力の高い世界にいることが多いからだ。

「ふむ、今の空き世界で該当するのは我とおぬしを含め12人で43世界か」

「意外と多いな」

ここからはボーナスポイントをいうもので選定される。高ければ高いほど古い世界が選定される。

「我的世界は3つで34、35、76、78、96、99じゃな」

「ふむ、私は1つしかなくて51、53だな」

「早く終わって欲しいものじゃ」

「うむ」

普段であれば50台、70台で妥協するものが多い。

粘り強いものでも80台がほとんどだ。

稀に幸運に巡り合って90台前半のものも現れるが…。

しかし、今回の選定は彼らにとって試練とも言えるものになった。

…

…

…

…

…

.....
.....
.....

いったいどれほどの時間が経っただろうか？

12人の管理人は疲労していた。

原因は只一つ。

界渡りがボーンスポイントを選びなおしているからだ。

「何回目だ？」

「もう数えたくもないわ」

若い管理人からそんなぼやきが漏れるのも仕方がないだろう。

「だあああついいじゃん82！なんでやり直すんだよっ」

70P以上がでるとまさに阿鼻叫喚であった。

もはや粘り強いとか言う問題ではなかった。

「無機質に淡々としておるの」

「うむ。種族といい、あれに当たった管理人は気苦労が多そうだ」

90台の管理人は3人。

一人を抜かし鬱々としていた。

「なんか楽しそうですわね、私達の可能性が高いのですよ？」

「いやなに、もし我が当たったらなにか褒美をやるうかと考えておった」

「ちよっ！」

当人以外の全員が慌てる。
過度の干渉は違反行為だ。

「なに、ちと世界の常識を授ける程度じゃ」

「……まあ、ぎりぎりですわね」

ただでさえヴァンパイア種、しかも予想が通りなら90台はもはやチートだ。

管理人がさらに能力やアイテムを授けたら世界が狂う。

管理人は管理をするものであって、故意に干渉していい存在ではない。

「ん？」

「決まっただけだね」

界渡りの前には99の文字が輝いていた。

11人の管理人はほっとしてその場を去る。

「ほどほどにな」

「うむ」

残された管理人は11人を見送ると改めて息をつく。

「さて、彼女が降り立って世界はどうなるかのう」

【閑話】 管理人から見た世界選択（後書き）

あってもなくてもいい話だったかもしれない。

第三話【陽光下での身体能力60%減】（前書き）

やっと異世界に到着。しかし自分でかくのって大変ですね。。

槍の名前と効果を変更…。

ロムルスの槍は知名度が低かった（T・T）

第三話【陽光下での身体能力60%減】

引き寄せられるように目が覚める。
もちろん見えるのは知らない天井。

起き上がって体を確認してみるが、見事に作成したキャラクターだった。

ヴァンパイアについて考えると脳内に知識が浮かび上がる。

【ヴァンパイア族

世界の夜が産み出した希少種。

不老。暗視。怪力。魔力大。体力大。

人間との見分けが難しい。

【陽光下での身体能力60%減。】

…は？陽光下での身体能力60%減？
聞いてない。

あー、でも灰になるよりはましかなあ。

現在地と考えるとまたもや脳内に浮かび上がる。

【大陸名：フィルレイ

国名：ルドン

街：アームルト領 メロセフ

建物：篝火の宿 206】

親切だな。

10歳までの一般常識がどんなものかはわかんないけど、とらあえず生きて行くには困らない程度らしい。

大体15〜20歳で独り立ちかぁ。

私のステータスはどうかな？

【ミコトカガリ

ヴァンパイア族 15歳 女 レベル1

属性 闇、雷、水

槍術士 レベル1

魔術師 レベル1

なし

称号 なし

所属国 なし

所属ギルド なし

装備品 ロングヌス、回復の指輪

所持金 107805セル

控え職業 なし

常時発動スキル：暗視、鑑定

任意発動スキル：テレポート、闇魔術レベル1、水魔術レベル1、雷魔術レベル1、槍技能レベル1】

ふむ。

常識では魔術師は少なくて才能が必要。

大体人間や獣人だと一万人に1人の割合、エルフとかドワーフだと1000人に1人か。

しかも第二・第三職業と言う認識はなく、武器職業以外は各ギルドでの承認で職業が変わると。

んで職業が変わるとその職業固有のスキルが使えなくなるのか。

ギルドは冒険者ギルド、魔術師ギルド、職人ギルド、神官ギルドか。

あー、テレポートって魔術師固有かあ。

魔術師ギルドじゃなくて冒険者ギルドに登録したいし、あんまり人前で使わないでいようっと。

さて、この槍と指輪の性能はっと…。

【武器鑑定

槍レベル

ロングヌス

所有者 ミコト「カガリ

ダメージ+500%、致命打率+25%、集中力+50%、状態自動回復

「爆ぜよ、滅つせよ、そして再生せよ!」】

【装備品鑑定

指輪レベル

回復の指輪

状態異常耐性60%、体力常時回復6%、魔力常時回復6%】

あはは……、チート武器だよこれ。

しかも所有者が刻まれてるから私以外は持てないとか、なんて都合主義つ。

普段はペンダントサイズのようになっていて、使うときに大きくな

るらしい。

さて、状況確認もしたしどうしようかな。

所持金は管理人様がくれたみたいだけど、潤沢すぎるんじゃないだろうか？

年収が一般人で大体50000セル。

それなりの冒険者で大体80000セル。

107805セルは15歳の小娘の持つ金額じゃないだろう…。

大金持つてるの怖いなあ。

盗難的な意味でっ！。

この世界に銀行ってないし…。

ギルドに早く登録してカードもらうかあ。

ギルドカードはお財布もかねてあって、所有者が刻まれるから本人以外は使えない。

まあ、無くしたら見つからない限りその中のお金は無くなるんだけどねっ！

カード自体は再発行可能。

あと冒険者の必須小物、アイテムボックスも買わないと…。

アイテムボックスっていつても形は様々で一般的なバッグや指輪はモチロン、腕輪やネックレスタイプもある。

うん、そうと決まれば早速冒険者ギルドに行きますか。

第三話【陽光下での身体能力60%減】（後書き）

今日の分はこれにて終了。

第四話【現在すでに死にそうです】（前書き）

もう死亡フラグな件（、、）

第四話【現在すでに死にそうです】

一時間前の自分に言いたい。

なぜ陽光下で身体能力が60%減なのを忘れていたんだ。

現在すでに死にそうです。

なるべく日陰を選んでいるが、正直キツイ。

宿屋で聞いた冒険者ギルドまで後少しとは言え、マジ死にそう。

これ、常識知識にはないけど実際体力削られてるっばい…。

回復の指輪がなかったら今頃瀕死かもしれない。

なぜ昼に行動しようと思ったんだ私！

…

…

…

………

そんなこんなで割と危機的な感じで冒険者ギルドに到着。

途中で購入した日傘がなかったら死んでたかもね！

100セルもしたけど良い買い物だったわ。

だいぶ重いけど……。

「すみません、ギルド登録をお願いします。」

空いてるカウンターで事務員さんに伝えるとすごく驚いた顔をされた。

「なんですか！」

「お嬢さんが？えつと遊びかなにかかな？」

「いえ、本気です」

「……………」

「……………」

沈黙されたので沈黙してみる。

「失礼ですが年齢はいくつですか？」

「15歳です」

「……………はあ、まあいいでしょう。こちらについてきてください」

多少戸惑われつつもギルド登録の部屋に案内される。

「これよりギルド登録を行います」

「はい」

青白く光る魔法陣の中央に立つ。

ギルドカードに個人の情報を書き込む作業だ。

ちなみに15歳未満はこの魔法陣が発動しないらしい。

「心を静めてください。少し頭痛を感じるかもしれませんが、すぐに治まるので大丈夫です」

言われて青白く光る魔法陣を見つめると、光が強くなり身体を突き

抜けていく。

頭痛と言うよりも浮遊感を感じながらしばらく動かずにいると光が元に戻る。

「登録完了です、こちらがアナタのカードです」

確認すると名前、種族、性別、年齢、レベル、所属ギルド、職業（第一職業のみ）、所持金が記載されている。
種族があるのは頂けないなあ。

「所持金などは他人に見せたくないんですけど」

「でしたらこちらの台にカードを乗せて、所持金と種族しか隠せませんが隠すよう念じてください」

言われて隠れるように念じる。

「完了です」

あっさり終わった。

なんだか拍子抜けのような気もするが、こんなものと常識知識が告げている。

「他にご用はございますか？」

「所持金をカードに移すのと、アイテムボックスを購入したいのですが」

「わかりました、受付で行いますのでこちらにどうぞ」

事務員さんが事務的です。

最初の驚きはどこにいったんだろう？

受付カウンターに戻ると早速持ってきたバッグからセルを取り出す。
107705セル（白金貨10枚、金貨7枚、銀貨7枚、銅貨5枚）
を見て一瞬固まった事務員さんであったが、何事もなかったかのように取り出した箱にセルを入れてカードを上に乗せる。

「……………はい、完了です。あと、あんな大金をあまり貨幣で持ち歩かないでください。」

「はい」

ちよつとした忠告付きでカードを返される。

ちなみに箱に入れたセルは消えるらしい。

仕組みはよくわからない。

「……………ではアイテムボックスですが、形状はどうなさいますか？」

「腕輪をお願いします」

「わかりました、見本をご用意しますのでしばらくお待ちください」

立ち上がりうとして事務員さんが気がついたように私をみる。

「時間が少しかかりますので、よろしければあちらの依頼掲示板をご覧ください。では如何ですか？」

「そうですね、そうします」

言われて掲示板の方を見ると、如何にも冒険者って感じの人がいっぱいいた。

依頼ランクの掲示板を見ると探し物だの、たいていが雑用だった。

まあ、冒険者ギルドってある意味何でも屋だしね。
ちなみに職人ギルドがある意味職業やお店の斡旋所って感じ。

ぼーっと見てるといつの間にか事務員さんが後ろにいてビビった。
この人、実は実力者だったりして。

【個人鑑定

ナパーク 43歳 男 レベル73

職業 剣術士レベル66

所属ギルド 冒険者ギルド

称号 冒険者ギルドメロセフ支部長】

うええうつ支部長がなんで受付事務員してんのさあつ！

驚愕に目を開いたままでいても事務員さん…。

基、ナパークさんは気にしないでいるのか普通にカウンターに案内して腕輪を見せてくれた。

「こちらがミコト様の所持金で買えるアイテムボックスの腕輪形状です」

あー、この人は所持金知ってるから絶対買えない物は持ってこなかったのか。

しかし、色々あるんだなあ。

鑑定スキルを使ってよさそうなのを選ぶ。

【装備品鑑定

アイテムボックス

腕輪

素材 金 オブシディアン

容量 6500】

価格 30000セル

【装備品鑑定

アイテムボックス

腕輪

素材 金 サファイア

容量 6800】

価格 32000セル

【装飾品鑑定

アイテムボックス

腕輪

素材 白金 オブシディアン

容量 8500】

価格 52000セル

【装備品鑑定

アイテムボックス

腕輪

素材 白金 エメラルド

容量 9000】

価格 55000セル

高いのか安いのか微妙です！

いや、普通にアイテムボックス自体が高いんだけどね！！
値段に悩んでいるとナパークさんがアドバイスをくれる。

「白金で出来たものは一生物としてお使い頂けますよ」

「やっぱりそうですよね…」

「私のオススメはこちらのオブシディアンのほうです」

おや、てっきり高いほうかと思ったけど違うみたい。

「重量の問題なのですが、エメラルドは重いものを収納するのにはむいていません」

「そうなんですか」

「その点、オブシディアンを使ったものは重量制限がありません」
「へえ」

そんな優れもののになんでエメラルドのより安いんだろう？

「とはいっても、一般的なドロップ品を収納するのにはそこまで重量に気を遣いませんけれども」

「あ、そっか…」

ドロップ品で単品の重量がものすつごくあるものを落とすモンスターなんてそうそう居ない。

居ても超上級者でなければ狩れないだろう。

「それから…ミコト様はおそらく闇属性でしょうからオブシディアンとの相性がいいと思いますよ」

「え…」

「申し訳ありません、カード作成の時に種族が見えてしまいましたもので」

「あー、いえ…できれば他言無用でお願いします」

「もちろんでございます」

そっかー、そりゃそうだね。

しっかし…うん、何だろー弱みを握られた気分。

「じゃあ、オススメのこれにします」

白金とオブシディアンで出来た腕輪を指差す。

「かしこまりました、所有者を刻みますので少々お待ち下さい」

ナパークさんが他の商品を下げて選んだ腕輪を取り出した台の上に置く。

ギルドカードも置いたので精算も一気にするらしい。

台がほんのり光って所有者を刻み終えたらしい。

本当にこういったことの仕掛けはどうなってるんだろう？

常識知識では「そういうもの」となっている。

オーバーテクノロジー？

第四話【現在すでに死にそうです】（後書き）

補足的なナパーク視点と管理人様視点も近日公開予定です。

【閑話】ナパーク、出会う。（前書き）

ナパークは主人公にとって重要な人になる……予定なんです。

【閑話】ナパーク、出会う。

冒険者ギルドメロセフ支部長のナパークの趣味は、受付に座ってギルドを訪れる若者を見守ることである。

若い頃は国から勧誘がかかるほどに活躍していたが、モンスターの攻撃で利き腕に怪我を負ったのを機にあっさりと冒険者ギルドの事務員になった変わり者だった。

そして今、彼の前で未来広き若者が魔法陣の中央に立っている。魔法陣は無事に発動して彼女の目の前にカードが浮かび上がった。ナパークが確認のためカードを見て思わずかたまってしまった。

【種族 ヴァンパイア】

現在確認されている個体数最小のヴァンパイア族。それが今まさにナパークの目の前にいるのだ。

少女、ミコトにカードを差し出すと眉をひそめられた。

「所持金などは人に見せたくないんですけど」

（ヴァンパイア族なんておおっぴらにしたら、どこぞの愛好家やらに目を付けられますしね）

「でしたらこちらの台にカードを乗せて、所持金と種族しか隠せませんが隠すよう念じてください」

所持金はもちろん、種族も差別が発生して問題になる場合があるため秘匿できる。

ナパークは目の前のミコトが心配でしかたがなくなってきた。日傘を差していたとはいえ、こんな陽気の良い日に出歩いていることから、もしかしたらあまり自身の種族を知らないのかもしれないと予想したためだ。

（確か旅の途中で会ったヴァンパイア族の男も自身の種族をあまり知らなかったな、ヴァンパイア族とはそういうものなのだろうか？）

ミコトが所持金の移動とアイテムボックスの購入を希望したので、ナパークは内心ほっとした。

（購入作業が終わるころにはきっと陽も傾いているに違いない）

そして受付で持っていた袋からおもむろに取り出された金額にナパークは頭を抱えなくなった。

（こんな少女にこんな大金を持ち歩かせたのは誰だ！）

所持金を移動する間、ミコトを15歳まで育てたであろう知りもしない人物に怒りがこみ上げてくる。

「はい、完了です。あと、あんな大金をあまり貨幣で持ち歩かないでください」

「はい」

ミコトの表情から自覚はあったようだと判断すると、ナパークは次の用件に移る。

腕輪形状のアイテムボックスを要求されたので席を立ち上がりかけてふと動きを止める。

（いつそずっと使える物をだしてみますか、資金はあるようですし…）

そうなれば取ってくるのに時間が掛かる。

その間ミコトが退屈するだろうと依頼掲示板を勧めた。

（一生物なら白金ですが金の物でもなかなか使えますよね）

白金物を5種類と金物を6種類、あとは銀と銅、鉄の物をそれぞれ10種類選ぶ。

（ヴァンパイア族は闇属性が多いと聞きますからオブシディアンの方がいいですね）

とはいえ、趣味もあるだろうと他の宝玉を使ったもの物選んでいた。

ちなみにナパークの愛用しているアイテムボックスも白金とオブシディアンのも物だった。

もちろんデザインはかなり違う。

ナパークのはそれこそ防具にもなりそうなゴツい物だが、ミコトに選んでいるのは華奢なデザインのものだ。

選び終えて受付に戻るとミコトはまだ掲示板を見ていた。

驚かせないようにとそつと近付いてみたが逆に驚かれてナパーク自身も少し驚いたなど些細なこともあったが、何事も無かったように受付で腕輪を選び始めた。

そして、ナパークは失礼だと思いつつもミコトが腕輪を選んでいる間、紙にヴァンパイア族の特徴と注意事項を書いていく。

ナパークの中でミコトの保護者は使えないダメなヤツとなっていた。

（こんなものですかね？）

書き終えてミコトを見るとまだ悩んでいるらしいので、よかれと思いいくつかアドバイスをする。

結果、アドバイスに微妙な顔をされてしまい些か出しゃばりすぎたかとも反省するはめになった。

【閑話】ナパーク、出会う。（後書き）

ナパークは世話焼きさんなんです。

第五話「だが断るっ」(前書き)

話がなかなかすすまないです(´・ω・｀)

第五話「だが断るっ」

用事も終わり、さあ帰ろうと言うところにナパークさんがまったを掛けてきた。

「まだ陽が傾くには時間がかかりますよ」

しまった！

陽光下でのあの危機的状況を忘れてた！

とは言え、掲示板も見たしすることもないし…。

あーでもない、こーでもないと思っていたら、またもやナパークさんが紙を差し出してきた。

「えっと？」

「失礼かとは思いますが、ミコト様の保護者の方はアナタの種族について詳しくないようですので、わたくしの知る限りの事を書き出してみました」

親切だ！

なにこの人親切すぎるっ！

「ありがとうございます、助かります」

素直に受け取って礼を述べるとナパークさんが言いにくそうにしていたので首を傾げてみる。

「えっと？」

「いえ、アナタを保護していた方はどういう方なのかとおもって…」

保護者……、管理人様は保護者じゃないし。

「そのような人は居ませんけど……」

「は？」

あれ、なんかすごく驚かれてる？

「居ない、というところ……つい最近独り立ちされたから今はいないという意味でしょうか？」

「えっと、そもそも居ません」

「………は？」

あれ……、なんかやばい？

なんか変なこと言った？

「アナタを15歳まで育てた人が居るはずですが……」

え？ヴァンパイア族って生まれたときからそれなりに成長してるんだよね？

「居ないです」

「まさかっ……」

やばい、どうしよう……。

ナパークさんが絶句したまま動かなくなってしまった。

「………っ！ ミコト様」

「はっはい！」

「本日このあとのご予定はございますか？」

一分間ぐらい固まっていたと思ったら、なんだか苦虫でも嚙んだみたいな表情で聞かれた。
もちろん予定なんか無い。

「ない、です」

親切にされたので素直に答えてみる。

「それはよかった、では上でお話しましょうか」
「うえ？」

なにがよかったんですか？！

そしてお話は決定事項ですかあああつ！

展開が早すぎてついて行けてないですけどー！！

…

…

…

…

そして私は今、最上階の支部長室にいます。

なにこの状況…。

なんかのフラグだったの？

死亡フラグじゃないよね？よね！？

ヤバい緊張で皮膚がピリピリしてきた。

心なしかじわじわ体力を削られてる気までしてくる…。

「ああ、忘れてました」

って、なにカーテン閉めてるんですかつ。

ランプの灯りが幻想的でいい雰囲気だなおいっ！

ぬおおっさらにヤバい状況になってきてる？！

つかナパークさんにまさかのロリコン疑惑？

ある意味死亡フラグよりたち悪いフラグじゃないかああっ！

「さて…」

ひいいいっ！

ヤバいやバいっここは先手必勝に限るっ！

「話というのはですね「だが断るっ」…は？」

「ロリコンの慰みになるのも死ぬのも御免こうむる！」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………はあ」

あれ…？

なんか深いため息つかれたよ。

私、なんか間違えた？

第五話「だが断るっ」(後書き)

ナパークは精神的ダメージを受けた(笑)

第六話【お説教マジ怖いっ！】（前書き）

誤解は早めにときましょう。

第六話【お説教マジ怖いつつ！】

結果、ものすごく怒られました。

ナパークさんの後ろに静かに燃える青白い炎を見た気がします。

「誤解は解いていただけましたか？まだのようでしたら最初から…」
「バッチリです！ここに来たのは私の素性を聞くためで、カーテンを閉めたのは日差しが私に当たらないようにでありますっ」

ナパークさんコワいつ！ナパークさんコワイ！お説教マジ怖いつつ。

ナパークさんは頷いてすっかり冷めたお茶を飲むと「さて本題ですが…」と切り出してくる。

「まずミコト様は生まれてから15年間なにをしていましたか？」

今日この世界に来たばかりですとはさすがに言えないよね。

「えっと、わかりません」

「どついう意味でしょうか」

「今日、目が覚めたら篝火の宿の一室に居ました。それ以前にこの世界で過ごしていた記憶はありません」

うそは言っていないよね。

「ヴァンパイア族は世界が産み出すのですから、私も今日生まれたのではないのでしょうか？」

「ふむ、確かにヴァンパイア族の誕生については謎が多いですが…、では誰が宿の手続きを？あと誰からあのような大金を？」

管理人様ですとはいえないよね…、どーしよー…。
ここはやっぱり…

「わかりません」

私の言葉にナパークさんが顎に手を当てて考え込む。
これはあとで宿に確認に来るな、絶対。

「まあ、宿については後ほど確認することにしましょう。 お金に
ついては…、いいでしょう」

やっぱりな！

でもお金はスルーなんですかつ！
むしろそこが重要じゃね？

「ミコト様は些か不足しているとはいえ、知識をもっておいでです
が誰に教わったのですか？」

管理人様からのプレゼントです…。

「せっ世界からのプレゼントではないでしょうか？」
「世界から、ですか…」

怪しんでるっ！
めっちゃ怪しんでるよっ！

どうしよう、このまま突き詰められても困るんですけど…。
どう言訳したらいいかなあ？

「ふう、まあヴァンパイア族ならあり得そうですね」

あり得るんだ。

「知り合いのヴァンパイア族も気がついたら真夜中に森の中に放り出されていた、とってしまいましたし」

「ヴァンパイア族に知り合いがいるんですか?!」

個体数激少なヴァンパイア族のツテゲット!

「ええ、彼やアナタは運がいいのでしょうね」

「え?」

なんでさ?

「ヴァンパイア族は生まれて直ぐ死亡する確率が激しく高いんですよ」

マジで!

聞いてないんですけど!!

「えっと、どうですか?」

死活問題なのでぜひ詳しく!!

「八割が生まれてすぐの陽光で死にます」

「……………」

あれ、今日の日中出歩いてたのってマジ自殺行為?

「ぐ、具体的には…？」

「私の実験では日中の陽光下では数値にすると3分で1割の体力消費で、日陰だと6分で1割の消費です」

陽光下は30分で死ぬのか…。

………ん？

「実験、したんですか？」

「はい」

わー、アツサリ頷いたあ…。

恐らく実験台になった同族オツ。

「彼は真夜中に、アナタは建物内に移動されたかそこで生まれたのですぐに陽光に当たらずにすんだのでしょう」

危なかったのね…。

「生き残ったものでも、陽光に照らされて弱まっているところをモンスターに襲われたりして死亡する者が多いです。実際、彼と出会った時は陽光とモンスターの攻撃で死にかけてました」

「そ、そうなんですか…」

ヴァンパイア族って実は弱い？

少しがっかりだなあと考えつつお茶を飲む。

「…薄っ！」

「は？」

「あっえ…なんでもありません」

ヤバイ、お茶のあまりの薄さについて声がでちゃった。

「そうですか、ちなみにミコト様はヴァンパイア族についてはどのくらいご存じですか？」

「世界の夜が生み出した希少種で、不老であり体力と魔力が多くて怪力で暗視を使えるって言うのと…陽光下での身体能力60%減ってことです」

言ったらまた微妙な顔をされました。

「独り立ちについては？」

「大体15〜20で独り立ちをするんですよね」

「ギルドについては？」

「冒険者、魔術師、職人、神官のギルドがあって冒険者の武器職業以外は各神殿で職業を変えられるのは知ってます」

「ギルドカードやアイテムボックスはご存じなんですよ」

「はい」

「通貨や物価…生活知識は？」

「生きていくのに困らない程度には」

「つまり？」

「簡単な料理や家事全般、食材についての知識はあります」

なんだろう？尋問されてる気分になってきた。

第六話【お説教マジ怖いっ！】（後書き）

説明文の次は質問攻め…、読みづらい文で本当に申し訳ない。

第七話「上げて落とすとかたち悪い」(前書き)

お気に入り50件越え!!!

読んでくださってる皆様ありがとうございます！

第七話「上げて落とすとかたち悪い」

「20歳をすぎて、どこのギルドにも登録できなかった人がどうなるか知っていますか？」

「いえ」

「ギルドに登録すると年に一度税金を納めますが、納められないとどうなるかは？」

「知りません」

「家や土地の購入方法は？」

「わかりません」

うう、10歳の知識にそんなのないよ。

つか税金払うのかよっ！

いくらだろうっ…。

「……奴隷はご存じですか？」

「……存在だけは」

この世界には奴隷が居るってのは識ってる。

正直いやだな。

隷属の首輪を付けられていて所有者が死んだら奴隷も道連れ。いつの時代の王様だよ！

「この国の主な領地やダンジョンについては？」

「この領地にダンジョンが有るのは識ってます」

よく考えたら世界のことまったく知らないじゃん！

現在地がわかるんだからそのぐらいの知識も欲しかったよ管理人様！

「職業や称号については？」

「…？」

すみません、質問がアバウトすぎです。

「…というところ？」

「そうですね、ミコト様なら槍術士で私なら剣術士ですが…そう言った職業の種類と獲得条件。 称号もどうしたらそれが獲得できるかと言ったのですが…ご存じないんですね？」

「詳しくは知りません…」

魔術使ったら魔術師とかにさくつとなるんだと思ってました…。

「槍術士のレベルが1ですが、他の武器を扱ったことは…ないですよね…」

「はい」

今日この世界に生まれましたからね！

「わかりました」

「え？」

なにがですか？！

まさか…トリッパーだとばれましたか？！

「ミコト様の知識は10歳ほどの修行にでる前の幼子を持っている程度ですよ」

「修行って？」

滝にでも打たれるんですか？

「そのままの意味です。 ミコト様は昨日まで剣も振るったことのない子供がいきなりモンスターと戦えたり、鍛冶道具を持ったこともない子供がいきなり鍛冶をできると思いますか？」

「無理です」

高確率で死ぬんじゃない？

鍛冶だって相当の経験が必要なはずだし。

「その通りです、ですから10歳を超えたあたりから修行に出るんです」

意味はわかりますけど、結局言いたいことがわからないので首を傾げてみる。

「つまり、ミコト様は年は15歳でも実質生まれて一日しか経っておらず経験が全くない。しかも独り立ちする為の知識も足りない。そんなミコト様が冒険者ギルドに登録したこと事態が無謀だったわけです」

「っ！！」

ショックだ。

なんかわかんないけど激しくショックだっ。

「ぎ、ギルド登録したのが取り消されるとか、ですか？」

ヤバい、泣きそう。

登録消されたらどうやって生きていこう…。

その前に私の知識じゃ独り立ちすら出来ない、もしかして一人で生活もできない？

生活資金だつてさっきアイテムボックス買ったから減ってるし、モンスタードロップ売るにしても日中に戦うのは無謀だし…。

ダンジョンなら陽光は届かないけどなぜかギルド登録してないと入れないんだよね…。

お先真つ暗じゃん…。

「取り消したりしませんからそんなに落ち込まないでください」

うなだれた私にナパークさんが慌てて言う。

そっか、よかったあ。

これでとりあえずダンジョンに入ってちまちま経験値稼ぎつつお金も稼げば生きていけるかもしれない。

「よかったです」

うん、この世界での生活に希望が見えた。

「ですが、このままミコト様を独り立ちした冒険者として扱うことはできません」

「なっ！」

上げて落とすとかたち悪いです！
つてかどうしろと…。

「ミコト様」

「はい……」

「今からみっちり修行していただきます」

「は？」

「安心して下さい、この私がミコト様を立派に独り立ちさせてみせます。まずは知識と……レベルを10にしましょう」

あれ？

これって何展開？

…

…

…

…

…

…

…

し、死ねる…。

一夜漬けにもほどがあるって！

なんで普通1年以上かけて覚えるものを一晩で！？

しかもナパークさん途中でいなくなつたし！

戻ってきたときに持つてきてくれたお茶は薄いし、晩御飯も薄味だし……ってか、素材の味100%って感じだし。うう……塩分と糖分がほしいっ。

「さて、そろそろ私は仕事に戻りますのでミコト様はその扉の奥の仮眠室でお休みになつてください」

「はい」

あまりも頭を使いすぎてぼーとしたまま頷く。

「今夜は近場のダンジョンにいつてレベル上げです。ゆっくり体を休めてください」

「はい……」

「では、よい眠りを」

「……………はっ！？」

ナパークさんが出ていった扉を呆然と見つめる。

今、なんていった？

今夜ダンジョンにいくとかいつてやがりましたか？

「どんだけスパルタなんですか……」

つい声に出してしまった。

第七話「上げて落とすとかたち悪い」(後書き)

ミコトががんばってる間、ナパークも動いてましたよ？

【閑話】裏ではいろいろありました。（前書き）

ミコトが勉強してる間、ナパークがいろいろしていたようです。

【閑話】裏ではいろいろありました。

正直、ナパークは非常に焦っていた。

世界が産み出したからある程度の知識があるというのはいいのだが、その知識の乏しさに思わず世界に恨み言といいかけるほどだった。

（それにしても、所持金といい宿といい謎過ぎる）

ミコトに世界地図を見せながらナパークは今後のことを考えていた。今のこの状況は正直いって【ありえない】のだ。通常生まれて直ぐのヴァンパイア族は神託を得た神術士に保護される。

もちろん保護される前に死亡する確率のほうが高い。

それなのにミコトは目が覚めたときに宿屋にいたという。誰かが保護したにしても姿を見せないのはおかしいのだ。

（さて、いまのうちに神官ギルドに連絡を入れますか）

「ミコト様、少し席をはずしますので…戻ってくるまでに少なくとも地図と各ギルドの特徴は頭に入れてください」

「うえ…、はい」

必死にメモをとるミコトに頷くと静かにドアを閉めた。

「支部長」

「ああ、ちょうど良いところに来てくれました」

ナパークが下に向かう途中で秘書官のムウが駆け寄ってきた。

「ちょうどよくないっすよ」

「何かありましたか？」

「支部長が幼女を部屋に連れ込んだって噂で下は大盛り上がりっす」

(…しまった)

人が少なかったとはいえ居ないわけではなかったので、ミコトを連れ出したまま戻ってこないナパークを何人かがかんぐっているらしい。

「誤解です、知識と経験不足の新人ギルド登録者を保護しただけですよ」

「じゃあなんでずっと出てこなかったんすか！」

「勉強中ですから」

「一体なん、の……すみませんごめんなさい」

ムウはナパークがにっこり笑って短剣に手をかけたのを見て慌てて謝る。

本気で殺気を感じたらしい。

「…で、下が騒がしいと」

「ひっ…」

「ムウ君、私は少し下で説明をしまするので、君は今すぐ神官ギルドの支部長に「今すぐ来てください」と伝えてきてください」

「は？……い、いやいやいやっ！！無理っすよ」

「私の名前を出せば大丈夫です」

ナパークは妙に自信たっぷりに応える。

そこでムウは現在の神官ギルドの支部長が、ナパークの同居人だったことを思い出していやいやながらも頷いた。

まあ、このままここに居てナパークがこれから行つ「説明」に巻き込まれたくないからでもあったが。

「……………モンスターでもでたのか？」

「いえ、少し皆さんと（武器で）語り合っただけです」

「…そうか」

ムウに帰宅するところを無理やり連れてこられて不機嫌であった神官ギルドメロセフ支部長、リアマは冒険者ギルドの惨状を見てひどく疲れた顔をした。

「呼び出したのはこれを回復しろとかだったら殴るぞ？」

「まさかそんな下らないことで呼び出したりなんかしませんよ」

心外といわんばかりに顔をしかめてナパークはリアマを伴い上に向かった。

途中、倒れていた冒険者を踏みつけていたような気がしたが気のせいだと必死に思い込む必要がリアマにあったのは、些細なことだろう。

そしてリアマが案内されたのはいつもの支部長室ではなく、その隣

の秘書官室。

部屋の住人であるムウは現在必死に下の惨状の後片付けをしているところだろう。

「今日は支部長室じゃないのか？」

「ああ、客人が使っています」

「客？」

「ヴァンパイア族のお嬢さんですよ」

「はああああ？！」

リアマは久しぶりに大声を出した気がした。

そんなリアマにナパークは気にした素振りもなく話を続ける。

「だから、明日の夜は予定を空けておいてください」

「意味がわからん！！」

「はあ……」

「え？私が悪いのか？なんでため息を私がかれるんだ？！」

「まあ、説明して差し上げます」

「何気从上から目線だな、お前……」

ぐったりとソファに寄りかかったリアマはナパークの説明を聞いて再び大声と共に飛び上がる羽目になった。

「ありえん！」

「そうですね、でも実際隣の部屋にはミコト様がいらっしゃいます」

「……うそをついている可能性は？」

「色々質問してみました、おそらくありませんね」

「信じられんな……」

呆然とソファに座りなおすのを確認してナパークはお茶を飲む。

「私を呼んだのは保護の為、か」

「いえ」

「は？」

「彼女はすでに我が冒険者ギルドの人間です」

「……ナパーク、しかしそれは」

「彼女の意思が最優先です」

そういわれてリアマは何もいえなくなる。

ヴァンパイアの保護は神官ギルドの管轄だが、当人が別のギルドを希望してしまえばそれ以上は手が出せない。

「ではなぜ私を呼び出した」

「明日の夜、ミコト様を連れてダンジョンに行くので付き合ってください」

「は？」

まさかのパーティ依頼に顔が引きつる。

だがナパークは本気であった。

「ミコト様が怪我でもして後が残ったら大変でしょう？」

冒険者ギルドメロセフ支部長、ナパーク。

かつては国にその名を轟かせた冒険者は、父性本能か保護欲が目覚めたらしい…。

「あと、ついでに神官ギルド本部にミコト様のことを知らせてきてください。保護者はアナタと私でいいですよ」

「そう、だな」

自分達が保護者であれば本部も下手な手出しはしてこないとリアマも頷く。

「それから、篝火の宿にいつてミコト様の部屋の手続きをした人物を聞いてきた下さい、できれば追跡も」

「……わかった」

「あと、あの年頃のお嬢さんが必要な洋服や雑貨なども調達してきてください」

「わかった…ってまで！なんだその雑用は」

「私には仕事がありますし、あの年頃のお嬢さんの必要な物なんてわかりませんから」

「私にも仕事があるんだが…」

「休めばいいじゃないですか」

さも当然のように言われた上に首を傾げられてリアマはめまいに襲われた。

（私、なんでこんなヤツに惚れたんだ？）

リアマの口から文句のかわりに深いため息がもれた。

【閑話】裏ではいろいろありました。（後書き）

リアマとナパークは夫婦ではありません。同居人です。

第八話「諦めてくれ」(前書き)

リアマさんご対面w

第八話「諦めてくれ」

目が覚めたらランプの灯りに照らされた部屋のベッドの上。

太陽なんて見えないよ？そもそもこの部屋窓ないし。

まあ、陽光なんか洩れてたら死亡フラグだからなくていいんだけどね。

それにしても昨日？のスパルタ授業のせいかまだ頭がぼーっとする。さて、今は何時だろ？

ナパークさんが夜になったらダンジョンで鍛える、とか無茶言ってくれやがってますので気になる。

あー、差し出された暖かいミルクが胃に染みる。

夕べのお茶は薄くて最悪だっただけにほっとするわあ。

さて…少し脳みそがはつきりしてきたので現状確認。

寝る前と部屋の床面積が違う。

いやそれも違うか。

床が沢山の荷物で埋まってる…。

そしてなにより、暖かいミルクをくれた見知らぬ人物、あなたはいつたい誰ですか？

【個人鑑定

リアマ 59歳 女 レベル68

職業 神術士レベル23

所属ギルド 神官ギルド

称号 神官ギルドメロセフ支部長】

………は？

「大丈夫か？」

「……はい、多分」

多分大丈夫じゃないです。

ナパークさんといい、この人といい何なの？

お偉いさんってこんなにあっさりあえるものなわけ？

「そうか、ナパークは手加減を知らないからな…知恵熱でも出してないか心配したんだ」

ですよねー。

独り立ちの為の基本知識とはいえ、一晩でつめこまれたら普通知恵熱ですよー。

いやあ、途中からこっそりステータス再振りでボーナス武器消してダメ元で作業効率アップにポイント注いだかいあったわあ。

作業効率4倍で21P…、便利かもしれない！

「どうした？やっぱり熱があるのか？」

黙ってたらリアマさんが心配そうに額に手を押してくれた。

なんか暖かくて気持ちいいなあ。

「えっと大丈夫です、ちょっと考え事をしてました」

「考え事？」

「はい……」

なんで神官ギルドの支部長さんがここにいるんですかとか、この床

の荷物は何ですかとか、いったい今何時なんだろうとか。とりあえず……。

「ナパークさんはどこに行ってるのかな、とか……」

「ああ、アイツはまだ仕事だ。終わるのは二刻後だ………とこるで」

仕事ですか、じゃあまだダンジョンには行かないのか。

「ナパークは起きたら自己紹介をしようと言っていたが、なぜ名前を知っている？」

あ、ヤバッ。

鑑定で見えてましたとかはさすがに言わない方がいいよね。

「……………さっきナパークさんの名前を言っていましたから」

言ってたよね？ね？

「ああ、そう言えばそうだったな」

っしゃ！ セーフ！！

危なかったあ…。

鑑定なんてスキル使えるの会計士だけだしね。
気を付けよう…。

「はい、えつと……」

「ああ、私はリアマだ。神官ギルドの支部長をしている」

はい、知ってます。

「本日付けでナパーク共々、ミコト嬢の保護者になったのでよろしくたのむ」

「は？」

「え？」

保護者？

私はもう冒険者ギルドに登録したから保護者とかいらなはず…。

「もしかして聞いてないのか？」

聞いてませんとも！

「ナパークに修行をつけてもらうんだよな？」

「えっと……多分」

ダンジョンで鍛えられるみたいだし。

「ナパークに保護を要請したんじゃないのか？」

そんな記憶はまったくくないです！

びっくりして首を横に振ると、リアマさんは眉を寄せた。

「あのヤロウ」

こわっ！なんかこわっ！

「……………ふー。まあいいだろう」

ながいいんですか、まったくわかりません。

「ミコト嬢、本来ならナパークが説明しておくべきことなんだが私から話そう」

「はあ…」

「ヴァンパイア族を世界が生み出したら、普通は私のような近くにいる神術士に神託が降りて、神官ギルドで保護することになっている」

うん、勉強しました。

「だがミコト嬢の場合は神託が降りずにいたばかりか、自らの意志で冒険者ギルドにすでに登録してしまっている」

はい、さっさと登録に来ましたからね。

おかげで進行形で大変な目に遭ってるけど…。

「つまり保護義務が冒険者ギルドに移ったことになる、というかギルドに登録してしまった時点で保護者はいなくなるのだが…」

リアマさんが言いにくそうに息をつく。

「あまりにも未熟な為、急仕立てでそれなりの経験と知識を付けさせる必要がでてきた」

未熟って……。

心に一万のダメージだよ！

「ちなみに、そんなことが本部に知られたらどんな手出しをしてく

るかわからないから、昨日私が神託を受けて保護し、本人の希望で冒険者ギルドにすぐ登録したことになっている。………というかなる」

なにゆえ未来像？

「だから、登録日をごまかせるギリギリ一週間で頑張ってレベル15になってくれ」

「……………は？」

それって普通は数年かかりますよね？

「大丈夫だ、今夜から早速ダンジョンに潜って鍛えるから」

いや、そういう問題ではなく…。

「もうすでにナパークがミコト嬢のギルド登録日をいじってるから」

犯罪の臭いがしますが！？

「諦めてくれ……、私も手伝うから」

リアマさん、なんか哀愁が漂ってますね…。

ちなみに、床いっぱいの荷物は私用の着替えや雑貨、防具に武器。そして一週間分の食料をはじめとしたキャンピングセットだった。

この世界に来て二日目、今夜からダンジョンに泊まり込み合宿みたいです。

第八話「諦めてくれ」（後書き）

リアマは実はノリノリで買い物してきたので尋常じゃない荷物量です。

第九話「どうぞお気になさらずに」(前書き)

ある意味死亡フラグが立ちそうな回

第九話「どうぞお気になさらずに」

さあ、いよいよダンジョンに向かうんだし、仕方がないから気合を入れられますかっ！

……そう思ってた時もありました。

「す、すまないミコト嬢」

いえいえ、いいんですよリアマさん。

「ナパークから15歳の少女としか聞いてなくてだな……」

ええ、ええ。

事実その通りですから。

「大きさまでは、その……」

ふっ、ふふふ…。

「まさかこんなに小さ」どうぞお気になさらずに「…そ、そうか」

今何をしてるかって？

リアマさんが買ってきた戦闘用にもなる服やら諸々な防具の試着で
すかなにか？

ちょーっと丈が長かったり、袖から手が出てなかったりしてるだけ

ですよ。

あーっ動きにくっ！

つかこの世界の15歳はそんなに背が高いのかよ！

くっそー……………チビっ子いじめだ。

しかも質素が美德なの？とか言いたくなるような飾り気のない厚手のワンピース…。

露出してるのは首から上と手と膝から下のみ。

感想はダサっ…いやいや、頑丈そうな服だね。

袖を折ってベルト（と言う呼び名の紐）で丈を調節する。

「今度ちゃんとミコト嬢に合う服を作ろう」

「いえ…」

自分で服ぐらい頑張って縫いますから気にしないでください、って
リアマさんやナパークさんの服を見る限りオーダーしたところで
デザインに期待は持てません。

ギルド支部長でそんな質素で頑丈そうなワンピースにローブですもんねっ！

くっそっ、総合技術力3の弊害か？

でもローブ自体の布地も縫製もいいんだよなあ、デザイン発案能力が足りてないとか？

「ミコト嬢？」

リアマさんのローブをじっと見ていたら首を傾げられた。

「なんでもありません」

「ん？……ああ、もしかしてローブが欲しかったか？すまない、槍術士と聞いていたので邪魔かと思って兼用のは買ってこなかったんだ」

……つまり、兼用じゃないのは買ってきたんですか。

「いえ、大丈夫です」

この服を見るかぎり普段着も期待できないなあ。
兼用が厚地、普段着がもうちょっと薄手な感じだけっぽいし。

「防具は体に合うように自動で調整が効くんだ」

便利だ、その機能が服に欲しいところだなあ。
なんて思いながら籠手や胸当て、ブーツを着ていく。

動きやすさを重視したので最低限らしい。
鎧というよりは弓道着＋ブーツみたいな感じかな？

「いい感じだな、動かしづらい部分はあるか？」

ぐるぐる腕を回したり足をあげたりストレッチをしてみる。

「問題ないです」

「そうか、それは何より」

ちょっと重い気がするけどなれば平気っぽいかなあ。

「槍も持ってみるか？」

「あ、はい」

言われて渡された槍を持つてみる。

なんというか、軽い。

プラスチックで出来たおもちゃの剣並みに軽い。

なんつーか、心許ないなあ。

「重くないか？」

「いえ、大丈夫です。ちょっと心もとないですけど」

正直に言ったら目を丸くして驚かれた。

「すまない、これ以上の槍はこの街の武具屋には置いてないんだ」

へー………って、はあ？

つまりこの街で売ってる最高の槍を買ってきてくれやがったのです
かっ！

私はもうそんなにお金持ってないんですがっ！

「ナパークならもうちょっと上物を持っているとは思っから、あと
で確認しよう」

いやいやいや、そこまでしなくてもってか代金払えないと思うので
やめてください。

ってか服とか雑貨の代金どうしよう…。

足りるかなあ？

「どうした？ナパークのお下がりには嫌か？」

「違います」

「ならなんだ？眉間にしわなど寄せて…」

そういつてシワをのばすように眉間をマッサージしてくれる。

「私、これ全部の代金分のセル持ってないかもしれません」

出世払いとかでも大丈夫かなあ？

「何だそんなことが」

「え？」

「私とナパークはミコト嬢の保護者だぞ？ミコト嬢の身の回り品や
独り立ちの準備を整えるのはあまり前だ」

なんですとー！？

「だめですっ昨日今日知り合ったばかりなのに！」

申しわけなさすぎる！

「気にするな、私もナパークも金なら余ってるし、ヴァンパイア族
の保護に使った金額は申請すれば神官ギルドが払うことになってい
る」

マジ？

「まあ、ヴァンパイア族はそのぐらい希少なんだ」

へー。なんかやっぱりすごいね、レア度

！

「ならちゃんと申請してくださいね？」

言わないとしなさそうだから釘を差しておく。

「ああ、忘れなかったらな」

……笑顔で返してきました。

これは絶対申請しなさそう……。
どうしよう……。

考えているとドアがノックされた。

「入れ」

「おはようございますミコト様」

「おはようございます」

大分おそようですがね。

「ああ、準備は出来てるようですね」

「いや、武器なんだが……その前に………どうしたミコト嬢？」

こういうのはちゃんといなくちゃ。

「ナパークさん、リアマさん。この度は会ったばかりの私の保護並びに修行にお付き合いいただきありがとうございます。本当に感謝してます」

「いえいえ」

「気にするな、受託者として当然だ」
「ですが！」

これだけは言っておかなくちゃいけない。

「私にかけた費用はちゃんと神官ギルドに申請してください！只でさえご迷惑をおかけしてるのにお金までなんて申しわけなさすぎてつつー！」

半泣きで叫ぶと二人は顔を見合わせて困ったように眉を寄せる。

「ミコト様、ちゃんと申請しますから安心してください」

「あ、ああ…。ちゃんと申請する」

よかったあ。

「でも迷惑とは思ってないですよ」

「ふえ？」

「そもそも迷惑ならリアマに押しつけければいいですし」

「おい…」

何気に酷いこと言っなあ。

「ミコト様が放っておけなかったんです」

ナパークさんの隣でリアマさんも頷いている。

「だからミコト様、迷惑をかけてるなんて思わないでください」
「……はい」

いい人だ！やっぱりナパークさんは良い人だ！

「私が修行をつけるのは初めてですので、ミコト様が初弟子となり

ますから少しワクワクしています」

「はい？」

なにゆえ？

「この私の初弟子がヴァンパイア族なんて、国中が注目しますよ」
「え？」

なぜだろう、嫌な予感がする。

「ナパークはこの国一番の冒険者と言われた男だ」

「は？」

「頑張りましょうね」

なんでそんな有名人がなんで受付とかしてるんですかあつ。
というかつ！

これはいったいなにフラグだああああ！

第九話「どうぞお気になさらずに」(後書き)

まだダンジョンに行けてない…だとう？

第十話【既になんか疲れた】（前書き）

やっとダンジョンに到達です。

そしてお気に入りが100件突破！！

やばい、心臓がバクバクする……っ

皆様本当にありがとうございます（〇〇）

第十話【既になんか疲れた】

「さて、ここが目的のダンジョンです」

「ちなみに去年できたもので、現在も攻略中だ」

陽もとつぷり暮れすぎだ真夜中と言って良い時間、私達は規模の小さなめのダンジョンの入り口に来ている。

「確認されているのは15階まで、見た目の規模からして20階ほどの小規模ダンジョンだと思われます」

へー、私から見たらただの馬鹿でかい土の盛り上がりですが…。

洞窟でも山でもなく、土の盛り上がり。

だいたい5階建てマンションぐらいの高さかな。

しかし、やっとダンジョンについたのかぁ。

長かったなぁ…。

まあ、ここに来るまで色々あった。

自己紹介する気まんまんだったナパークさんが、先に自己紹介てなおかつナパークさんの名前を教えてしまっていたリアマさんに拗ねたり。

木箱と仕切り用の板を貰って雑貨や服を用途別に5箱に纏めてからアイテムボックスに入れた私に驚かれたり。

なんで驚くのか聞いたらアイテムボックスには単品をそのまま入れるのが普通で、箱に入れて纏めるという発想が今まで無かったと言

うことに私が啞然としたり。

部屋を出たところにいた秘書官さんになんかやたらと哀れみのこもった目で見られたり。

受付があるところまでいったらその場にいた人からやっぱり哀れみのこもった目で見られたり。

ダンジョンに向かう途中でナパークさんとリアマさんが、修行の為に一週間休みを取った事実を知って私が恐縮したり。

それに対して二人が今まであまり休みを取ってなかったからむしろ喜ばれた、とフォローしてくれたり。

夜なのでお約束の酔っ払いが絡んできたと思ったら、ナパークさんを見て悲鳴を上げて逃げ出したり。

閉店間際のお店の人がリアマさんに残り物の野菜やお肉をくれたり。

二人に挟まれた私を見た道行く人がなんか驚いてたり。

ダンジョンの入り口の見張りの人がナパークさんを見て悲鳴を上げたり。

見張りの人が私をやっぱり哀れみのこもった目で見えたり。

色々あった……。

ダンジョンに入る前に既になんか疲れた気がする。

そして、今現在ダンジョンの入り口で何をするかというと…。

「では早速パーティーを組みましょう」

そう、パーティーを組むのだ。

「ミコト様、頭の中でも声に出してもいいのでパーティーに入れない人物に向かってパーティー要求をしてみてください」

いや、してみてくださいって言われても…。

「……」

頭の中でナパークさんとリアマさんにパーティー要求って考える。すると二人がパーティーに入っただのがわかった。

「成功ですね」

こんなんでいいのかっ！

「次にリーダー譲渡、と私がリアマにしてください」

言われてナパークさんにリーダー譲渡と考える。

「はい、完璧です。リーダーとそうでないパーティーメンバーの違いは、メンバーを増やしたり減らすことが出来るか出来ないかです」
「あと、ダンジョンに入るときはリーダーがギルドカードを持っている必要がある」

ふむ、ゲームみたい。

「パーティーメンバーはお互いの位置がなんとなくわかるようになります。また、モンスターを倒したときの成長エネルギーは人数分に分割されて吸収されるようになります」

「あとは、魔術師が使うテレポートはパーティーメンバー全体に作用するな」

ふむふむ。

「まあ、パーティーについてはこのぐらいですかね」
「はい」

忘れないように反芻しながら頷く。

「では入りましょう」

促されて暗くポツカリ開いたダンジョンの入り口の中に入っていく。

「……………なんか重い？」

一言でダンジョンの中を表現するならこれしかない。
空気がなんだか重く感じる。
通路は光苔？みたいなものがあるおかげで明るいのに。

「そうですね、この感覚がダンジョンとダンジョンでない場所との違いです」

ふむ、みんなこの感覚はあるのね。

「進みます、準備をしてください」

「はい」

アイテムボックスから槍を取り出してしっかりと握る。

ちなみにナパークさんが持っている槍は丁重にお断りした。ボーナズ武器も今回はお休みさせてる。

「左の通路にモンスターが居るな」

「では左に」

リアマさんはモンスターの居る場所がわかるみたい。いいなあ。

「……ん？」

「モンスターの場所はどやったらわかるんですか？」

「ああ、索敵と言うスキル能力だだ」

ふむ、ステータス設定にそんなのがあった気がする。

「私でもそのスキルはとれますか？」

「あー、受託と同じで才能の部分が大きいからなあ」

リアマさんが考え込む。

「目隠しをして、モンスターの居る場所に一週間ぐらい放置されたり取れたりもする」

なんすか、その物騒な取得方法。

「そうですか…」

まあ、持ってもおかしくはないってのがわかったしいいか。

「でたな」

「ですね」

無言で歩いてたら目の前にモンスターが現れた。

【モンスター鑑定

ヨトウムシ レベル3

弱点 火

スキル なし

ドロップ 絨毛、毛、銅】

「ひっ……」

芋虫の集団っつ！

ここはゴブリンとか狼とかじゃないのかよ！

芋虫とかマジ鳥肌っつー！！

「まずは私が見本を見せます」

いつの間にか槍を装備したナパークさんが一歩前にでる。

「槍術の基本は突くこと」

そういつて一匹を突いて殺す。

「次に叩く」

向かってきた芋虫を上から叩く感じで潰す。

「そして払う」

生きてた三匹をまとめて払って壁に叩きつけてから留めに突いて殺す。

死んだ芋虫から何かエネルギーが体に流れ込んでくるのがわかる。
これが成長エネルギーかな。

生き物を殺すという行為が嫌だ、とか甘いことを言う気はサラサラない。

というか何も感じない。

そのことを頭のどこかでヤバいかも…と思いつつも、これがこの世界の日常だと納得している。
モンスターは殺すものだ。

「わかりましたか？」

ナパークさんが芋虫集団を殲滅してから振り返る。

「はい」

槍の基本動作はわかった。
実践できるかはまだわからないけど…。

「では、リアマ…」

「…このまま真っ直ぐだ」

リアマさんの先導で歩くと程なくしてまた芋虫が現れた。
今度は一匹。

「ミコト様、やってみてください」

「はい」

槍を握りなおして芋虫と対峙する。
緊張で皮膚がピリピリしてきた。

第十話【既になんか疲れた】（後書き）

芋虫の集団……書きながら想像して実際鳥肌がたった（<―>）

第十一話【鬼がいる】（前書き）

この戦闘シーンに年齢制限はあるだろうか？

第十一話【鬼がいる】

「……………あれ？」

気合いを入れて芋虫を突き刺したけど、意外とあっさり刺さった。こんなもの？

首を傾げてそのまま横に払って壁に叩きつける。

「お見事です」

ナパークさんが誉めてくれるのを背中で受け止める。

殺したモンスターからエネルギーが流れ込んでくるのを確認してからも、しばらくじっとモンスターを見つめる。

色が抜けたように白くなって消えた後にはドロップ品が残った。

なんか、殺したっていう感覚がわからない。

敢えて言うなら駆除？

そう、害虫駆除したみたいな感覚。

うーん、前の世界では部屋に入り込んだ虫か台所の黒いアイツぐらいしか殺したことないから、自分で殺すのはもっと抵抗があると思っただけだなあ。

異世界転生補正？

それとも私っておもってたよりもと薄情なのかなあ？

「大丈夫か？」

「はい」

リアマさんが心配そうに肩をたたいてきたので振り返って頷く。

「ミコト様、モンスターを殺すことに対する抵抗はありますか？」

「不思議とないです」

「それはなによりです。モンスターには人型に近い物も存在しますから、殺すことを戸惑って死んでいく人も少なくないですからね」

人型か…。

「人型は、どう感じるかまだわかりません」

きつと戸惑うと思う。

いや、戸惑って欲しいと思ってる。

「戸惑わずに殺しなさい」

「え？」

「人型のモンスターはいずれも強力です、戸惑っていたら殺されま
すよ」

ナパークさんは真剣な顔で言う。

「モンスターは、殺さなければならないモノですよ」

「……………はい」

押され気味に頷いたら真剣な顔から優しげな顔に戻ってくれた。

「それにしても、流石はヴァンパイア族です」

「そうだな」

空気を変えるためか話題が変わった。

「一撃で殺せるとは流石に思いませんでした」

「リアマさんが買ってきてくれた槍が良いものだからですよ」

謙遜でなく心のそこからそう思う。

なのに2人は武器に振り回されないことこそがすごいと褒めくる。

なんか逆に萎縮しそうなんであんまりほめちぎってこないでください。

褒められると伸びるけど、褒められすぎると萎縮しちゃうんですってば！

うう…いたたまれないっ。

「次っ！次のモンスターに行きましょう！」

いたたまれなさすぎて思わず叫んでしまった。

「いや、行かなくてもいいぞ」

「は？」

「集団で来襲ですね」

えー、芋虫集団とかもう嫌なんですけど…。

「その前に…」

ナパークさんが呟いたとたんにパーティーから外された。
なんでさっ！？

「お一人で倒せるようですので、がんばってください」

わー、笑顔ですよこの人…。

え？なに？これって何プレイ？

「来たぞ」

ぎゃああああっ！

キモッ！！！！

キモすぎるううっ！

マジで10匹を超える集団がウゾウゾ近づいてくるしっ！

逃げたい！

むしろ逃げるが正義だよっ！

「一步でも引いたら更なる集団の中に放り込みます」

ひいっ！

ナパークさん、アナタはテレパスですか？

ぎこちない動作で振り返ると、イイ笑顔のナパークさんと引きつった笑顔のリアマさん。

前門の芋虫集団、後門のナパークさん…。

や、やってやらあっ！

「いやああああっ！！」

「いい気合いです」

「いや、あれは絶対悲鳴だろう」

相手は芋虫じゃなくては黄色いサツマイモ、相手は芋虫じゃなくては黄色いサツマイモ、相手は芋虫じゃなくては黄色いサツマイモ。

自己暗示ですがなにか？

ぶつぶつ悲鳴混じりに自己暗示をかけながら殺していく。

『シャアアア』

「ううっ？！ いやああああっ」

槍は強力だしリーチもあるけど、その分接近されると弱い。つまり、集団と戦ってる私は不利ってことなんだよね。

なにがいたいかって言うと……。

「いつの間にか近づいてるしいっ！」

一匹射程圏から突破されてた。

そして私のとつた行動は……。

「見事な蹴りですね」

「よく咄嗟に蹴る反応がとれたな」

そう、蹴った。

サッカーのシュートばりに思いっきり。

吹っ飛んだ芋虫は壁に激突してお亡くなりになりました。

だがしかし、それに気を取られてる暇はなかった。

「いい加減全滅してええ！」

まだ生きてる芋虫が向かってきてるからねっ！

「はあっはっはあ……」

っ、疲れた。

体力よりも精神的に！

計15匹を倒しきって壁にぐったりと寄りかかる。

「お疲れ」

リアマさんが差し出してくれた水筒から水を飲んで息を整える。

「では次に行きましょう」

ちよっ！

「少し休ませてやれ」

リアマさんナイスです。
まじでちよっと休みたい！

「怪我でもしましたか？」

「いえ」

「なら大丈夫ですね」

なにが？！

「今の戦いの感覚を忘れないうちに体にたたき込んでいきましょう」

……………鬼が居る。

基本的に多分いい人なのに鬼だつ。

継るようにリアマさんを見つめる。

「……………諦めてくれ」

うわーんっ！

またそれで片付ける気ですかあああ！

第十一話【鬼がいる】（後書き）

ある意味、主人公より濃いナパークさん。。。。

【閑話】とある日、とある処で…（前書き）

ミコトの死因は流れ弾に当たってですが、どうしてそんなことに？！
な、謎解明。

【閑話】とある日、とある処で…

『——未明、滞在中の日本人が——の抗争に巻き込まれ——り、死亡しました』

ニュースにしたらその程度の情報。

でも、僕にしたらあまりにも衝撃的な出来事。

（ミコト先生…）

死んだ日本人は僕の日本語の先生だった人。
ある日突然辞めてしまったけれど、僕を家の跡取りではなく【僕】
として見てくれた人。

（…許せない）

握りしめたせいで手のひらに爪が食い込んで皮膚が破ける。

父に言えば報復戦をしてくれるだろうか？
もとはといえば、憎まれることの多い我が家に勤めたのが悪かった
のだ。

そうでなければ今回の抗争に巻き込まれなかったはずだ。
少なくとも…父とあの日に会っていなければ、流れ弾になんて当た
らずにすんだはずだったのだから。

（でも、お母様は喜んでいるのかもしれない）

彼女を辞めさせたのは母だと確信している。
僕の家庭教師としてつれてこられた先生と父との不倫を疑っていた

から。

辞める直前は先生自身が父とも言い争っていたようだった。
もし本当に不倫関係にあったのならなにか揉めていたのかもしれない。

そう考えると、父に報復戦を頼んでも無駄かもしれない。

* * *

僕は今ミコト先生のお墓の前に立っている。

知らなかったけど先生には身寄りがなかったらしい。

巻き込んで死なせてしまったけじめにと祖父が葬儀を行い墓を建ててくれた。

葬儀には祖父と父と僕と、あとは先生の知り合いだと言う人が数人寂しい葬儀だった。

そしてやはりお母様は、来なかった。

父も祖父の手前渋々出ているといった様子だった。

祖父は、義理堅い人だから今回の責任を深く受け止めているようだ

った。

*
*
*

「先生、僕は今年で21歳になりましたよ」

墓前に花を添えて話しかける。

あの後、祖父の一言で報復戦が行われた。
血で血を洗うような抗争だった。

父と母は、その抗争で死んだ。

我が家は今祖父が動かしているが、もうじき僕が受け継ぐことになるだろう。

——コッ、

「来ていたのか」

「お祖父様……」

杖をつき、花を抱えてボディガードも付けずにやってきた祖父に目を見張る。

その腕にある花はミコト先生が好きだといっていた花で、毎年命日にこの墓に置かれていたものだった。

最初に墓に添えられているのを見たときはなんて不吉なことをするのだと激怒してしまった記憶がある。

けれどそこら辺の花屋ではなかなか手に入らない黒バラ。

2回目に来たときにそれが先生の好きな花だったと思い出してからは、花を持ってきている人物に興味がわいた。

その人物はきつと彼女のことを好きだったに違いないから。会って、話がしたかった。

けれど、ずっと会いたかったのに僕が来たときにはいつもすでに花だけ置かれていて、人影はなかった。

「お祖父様だったのですか？」

「なにがだ」

まさかそれは祖父だなんて想像もしていなかった。

「その花を毎年先生のお墓に置いていつていたのは、お祖父様だったのですか？」

「……………」

それには答えず祖父は墓に花を添えて祈りを捧げる。

長い、とても長い祈りだった。

「あの子には…、ミコトには申し訳なかったと思っている」

「それは…」

それは何についてだろう？

我が家の抗争に巻き込んでしまったこと？
それとも、もつと別のこと？

問いただそうとしたら、まるで答えを隠すように強い風が吹いた。

「——れて——なければ、——早く——れば」
「え？」

「あの子を、——が死んで——のは、私のせいだ」
「お祖父様？」

風が止み、祖父の背中を再度見つめる。

「すまない」

それは誰に向けての謝罪だろうか。
僕に対して？
それとも、先生に対して？

【閑話】とある日、とある処で…（後書き）

とある【家】同士の抗争に巻き込まれたようです。
そして名前すら出てないけどやっとな。が登場しました！

第十二話【笑ってごまかすか】（前書き）

前半部分は伏線になってない伏線です。

第十二話【笑ってごまかすか】

『私、黒バラが好きなの』

『なぜですか？』

『というか、黒が好きなの』

『なぜですか？』

『だって黒はそれ以上になりようがないでしょ？』

『意味がわかりません』

『全ての色を内包してそこに存在する色でしょ、黒って』

『それで結論はなんですか？』

『強い色じゃない、そして優しい色』

『では、白は嫌いなんですね』

『どうして？』

『黒とは逆だから』

『馬鹿ね』

『ひどいです』

『白は全ての光の集合体よ、黒の対であって真逆じゃないの』

『そんなものですか』

『興味なさそう』

『はい』

『まったく、これだから男はっ』

『では、私はミコトに黒バラを贈ります』

『え？』

『大切な日に、なにがあっても必ず贈ります』

『大切な日って？』

『とりあえずは誕生日です』

『この年になるとあんまり大切じゃない気がするけど…』

『ははは、それはますます贈りたくなります』

『もー、意地悪なんだから』

* * *

「夢、か…」

ずいぶん懐かしい夢をみたものだ。

あ、でも実はそんなにな経ってないのかな？

一晩寝ていくぶんスッキリした気がする。

昨日はあれからまた芋虫の集団に突っ込まれること8回。

階層を変えろと言われて2階にいったら、今度はイエローハウンド…つまり黄色い犬モンスターと戦わされた。

芋虫と違って動きは早いし攻撃力はあるしで、最後の方は一回死にかけた。

ナパークさんが一撃でその時の集団を殲滅させたけどね…。

くっそう、なにあの強さ！

ずるくない？

つか衝撃波でイエローハウンドがまとめて死ぬとかなんなの？

人が苦戦してるってのに！！

とはいえ、さすがに死にかけたので休憩という名の睡眠時間をいただきます。

ついでに寝る前にリアマさんに治療術をかけてもらった。

なんつーか、体力全快になる栄養ドリンク飲んだ後みたいになって、

逆になかなか眠れなかった。

「おはよう、ミコト嬢」

「おはようございます」

差し出された暖かいミルクの入ったコップを受け取って飲む。
あー、空きっ腹に染みるわー。

「ミコト様、おはようございます」

「ナパークさんもおはようございます」

ナパークさんからはサンドイッチ（みたいなもの）を差し出されたのでありがたくいただく。

………お塩とコシヨウをもっとかけたい。
相変わらずの薄味&素材の味ですね、ありがとうございます。

塩やコシヨウがない訳じゃないしなあ…。

節約？それとも単に薄味派なのかな？

もそもそとサンドイッチ（みたいなもの）を租借する。

今日もまたイエローハウンドの中に突っ込まれるんだろうなあ。
キャンキャンキャンキャンと耳なりしそうだわあ。

「ミコト嬢、カードをみせてくれ」

「あ、はい」

アイテムボックスから取り出して渡す。
あれ？微妙な顔された。

「ミコト様、カードの更新をしてください」

どうやってですか!?

え?自動とかギルドとかでするんじゃないかって自分でするの?
それってどうなの?

「カードをもつて更新するとも思えばいい」

受け取ってじつと見つめながら「更新」とつぶやく。
一瞬カードが震えて数字が変わった。

【ミコトⅡカガリ ヴァンパイア族 女

15歳 レベル5

職業 槍術士レベル3

所属ギルド 冒険者ギルド

称号 なし

所持奴隷 なし

所持金 55705セル】

おー、大分レベル上がったじゃん!

そういえば取得経験値八倍と成長率八割増加つけてたんだった。
んー、つてことは8×1.8?.....14.4倍で成長中?

すごいな、私!

うんうん、早期レベルアップはRPGの鉄則だよねえ。

「.....」

あれ？カードを覗き込んできたナパークさんたちが固まってる。
なんかまずいことで、も……あるよ！あるじゃん！！
今まさに私の手の中に！！

「あ、あははは……」

「「……………ミコト様（嬢）」」

「ひゃいつ」

約14倍成長とかないですよねっ。

やばいつやばすぎる。

完全におかしいと思われたあー！！

どういいわけしよう……笑ってごまかすか？！

「特殊能力もちだったのか？」

「レベル5になっているのならイエローハウンドごときに手こずらないでください」

は？

いや、リアマさんはともかくとして。

ナパークさん、つつこみどころはそこですか？

「こんなに早くレベルが上がるなんて、相当な特殊能力付きでない限り無理だろう」

「えーっと……」

なんといったらいいのかわかりません。

「ヴァンパイア族の成長は早いのは実験済みですから、まあ予想の範囲内です。ちょっと早すぎる気もしますが……」

ナパークさん、ヴァンパイアでどれだけ実験したんですか。
つてかまさか私も実験材料?!

「普通、レベル3のヨトウムシを5匹でレベル2に、25匹でレベル3、125匹でレベル4になるんだ」

3から4になる為の数が桁違いって…。

「まあ、レベル3になったらレベル5のイエローハウズクラスに移行してしまうのが一般的ですね」

へー。

「ちなみに3倍くらいの成長エネルギーが取得できます」

ふむふむ。

つまり、えーっと…約42匹であがるのね。

「で、レベル4から5になるには…レベル5イエローハウズ210匹ってところだ」

……………5倍ずつあがっていくのか。
だんだんエグい数になっていきそう。

でも、私はその1/14ぐらいでいいんだよねー。

「まあ、ヴァンパイア族というのと昨日の戦いぶりからレベル4にはなっただろうとおもってたんだが、それ以上だったな」

あー、まあ。

なんでもかんでも「ヴァンパイア族ですから！」ですみそうっていうのはわかった。

ってか、ヴァンパイア族ってもしかして皆私と同じ転生者？

……まさかね。

「さて、確認も終わりましたので。イエローハウন্ズの集団に飛び込んで準備体操をした後に3Fにいきましょうか」

………はい。

もう昨日一日でいろいろ諦めました。
長いものには巻かれるのが一番です。

第十二話【笑ってごまかすか】（後書き）

この話でストック分が切れました（<―>）

第十三話【十分規格外】（前書き）

話が全く進まないのはなぜだ…（； ʘ ʘ）

第十三話【十分規格外】

お約束のイエローハウンド狩りです。

キャンキャンキャンキャンガルルルってな感じに囲まれ中で命の危険をひしひしと感じて……………ない。

気分的には「はんっ雑魚が何匹集まっても無駄なんだよ!!」って感じ？

昨日死にかけたことなんか忘れましたが何か？

突いて払って突いて払って、を淡々とこなしていく。
流れ作業見なくなってきたのは慣れてきたからかな？

【モンスター鑑定

イエローハウンド レベル5

弱点 なし

ドロップ 毛皮、牙】

うん、同レベルに負ける気しないわ。

ところで、大分レベルがあがったので、鑑定スキルで自分の鑑定を試してみたらなんか色々増えてた。

【ミコトカガリ

ヴァンパイア族 15歳 レベル5

属性：闇、雷、水

職業：槍術士レベル3、魔術士レベル2、会計士レベル3

控え職業：製造士レベル1、拳術士レベル1

所属：なし

所属ギルド：冒険者ギルド

所属奴隷：なし

装備：ハルバート、回復の指輪、アイテムボックス腕輪型

常時スキル：暗視

任意スキル：鑑定、レポート、闇魔術、水魔術、雷魔術、槍技能、拳技能、製造技能、会計技能

特殊能力：取得経験値八倍、成長率八割増加、ステータス再振り、第三職業、作業効率四倍】

鑑定スキルに が突いたからなのか特殊能力が見れるようになったみたい？

そして、職業が増えてた…。

会計士はアイテムボックスか日傘を買ったからかな？

製造士は… たぶんアイテム整頓するのに箱をいじくったから？

謎なのは拳術士。

拳でなんか戦った覚えはないし！！

「っしょいつと」

槍の射程圏を突破して来たイエローハウンドの頭を踏みつける。

拳術士かあ、素手ってことだよなあ。

ずっと槍で戦ってるのになあ。

「邪魔っ」

じたばた動くので足蹴にしてたイエローハウンドの頭に一旦全体重

+αをかけて砕く。
つて！ 私が重量級みたいな殺しかたしちゃった。
なんかやだなあ…。

「なあ、さっきから気になってたんだが」

「なんですか？」

「ミコト嬢が足で攻撃してるときに魔力を感じる」

「ふむ、頭をあの体重と筋力で踏み砕けましたし、無意識に闇魔術を使ってるのでは？」

「ばかいえ、魔術士でもないのに魔術を使うには私のように特殊アイテムが必要だぞ」

「ですがヴァンパイア族は闇魔術を無意識に攻撃に付与してるみたいですよ」

「はあ？ そんなことはじめて聞いたぞ」

「まあ、実験の副産物的に『多分そう』と感じているだけでしたから、報告はしてませんでしたね」

「……………いつもながら実験されてた彼が気の毒になってくるな」

「いやですね、彼は積極的に実験に協力してくれましたよ」

「……………その協力の引き換え条件が…ああ、片付いたな」

「そのようですね」

最後の一匹を突き刺して死んだのを確認してから二人を振り返る。
なにか話してたみたいけどなんだったのかなあ？
まあ、いいけど。

ふと周りを見るとドロップ品の毛皮とかが落ちてた。

初めてドロップした毛皮に触ってみたらわりとゴワゴワしてた。
この手触りじゃ服とかには向かないかなあ？
んー、まあいっかあ。

回収してアイテムボックスに突っ込んでいく。

ああ、ちなみに芋虫のドロップ品も繊維毛以外は回収済みで結構たま
つてる。

ナパークさん曰わく売っても安く、子供のお小遣い程度にしか
ならないらしい。

でも、繊維毛はともかく毛と銅はわりと使えそうなんだけどなあ。

「大分慣れてきたみたいですね」

「はい」

素直に頷くとナパークさんは「では3Fに行きましょう」とか言っ
て先に行ってしまった。

なんてマイペース！

慣れてきたけどねっ。

そういえば3Fのモンスターはなんだろう？

長虫系じゃないといいんだけどなあ…。

いや、マジで長虫系嫌いだからっ！

3Fに行く途中に出てきたイエローハウンドはナパークさんが瞬殺
していく。

う、動きが見えない…。

ナパークさんってホント強いなあ。

「まてっ」

「おや…」

入り口の前に赤い球体が浮いていた。

【モンスター鑑定

ファイヤーエレメント レベル8

弱点 水

スキル 火魔術

ドロップ 火結晶】

モンスターがよっ！

槍を構えるとリアマさんが前に出て私を制した。

「エレメントには物理攻撃はほとんど効かない。属性付き武器での攻撃が魔術のみ有効だ」

なにその無茶設定！！

「私でも属性付き武器がなければ、エレメント系だとレベル20の相手をするのは一苦労です」

マジですか！！

あれ？じゃあ、リアマさんは？

魔術士じゃないから魔術なんか使えないはずじゃ？

「ですが、リアマはグラングリモアの所有者ですからね」
「グラングリモア？」

リアマさんを見たら見覚えのある本を左手に持っていた。
あー、昨日治療魔術かけて貰ったときに持ってたのと一緒にだ。

「神官ギルドの秘宝の一つで、所有者はスキル治療と己の属性魔術
を使えるようになります」

なにそれ！ちょー欲しい！！

「水よ我が意志により集結せよ、ウォーターアロウ」

「ましてやリアマの属性は水。ファイヤーエレメントなんて一撃で
終わりますよ」

ナパークさんの言葉の通りファイヤーエレメントは一撃で消えた。

しかし、なるほど「水よ我が意志により集結せよ、ウォーターアロ
ウ」か。

覚えておこう…。

ちなみに治療術の呪文は「内なる力よ目覚めよ、ヒール」だった。
多分体力回復と外傷治療かな。
解毒とかはまた別な呪文かもしれない。

「ここにエレメント系が出るなど聞いていないぞ」
「そうですね」

おや、なにやら真面目なお話？

「ここに入って帰還しなかった者が多数出ていましたから、もしかしたら今のに当たったのかもしれないね」

「なるほど、出会った奴が全員死んでいたら報告も上がらないか」

ほへー。

そんなにやっかいなんだ、エレメント系って。

でも会う人と会わない人が居るって微妙くない？
運の問題なのかなあ？

それとも法則があるとか？

「ほら」

「え？」

リアマさんが赤い結晶を投げてよこした。
これって火の結晶？

「持つておくといい」

「悪いです！」

多分レア品？をホイホイ渡さないで下さいっ！

「火の結晶なんか、邪魔なほど持つてるから私はいらん」

邪魔なほどってどんだけ？

「なら有り難く頂きます、ありがとうございます」

ナパークさんもだけどリアマさんも十分規格外な気がしてきた。

第十三話【十分規格外】（後書き）

そついうミコトが一番規格外だ！と思う作者です。

第十四話『邪道であつても』（前書き）

一日一回死にかける主人公の巻…。

第十四話『邪道であつても』

ファイヤーエレメントも居なくなつたのでナパークさんを先頭に3Fへの入り口を通る。

この階のモンスターはコボルトらしい。
まさにファンタジー系RPG！

コボルトとと言えば犬耳系な姿で登場するのが多いけど、どうなんだろう？

つてかもしかなくても二足歩行だよな。
知恵とかあつて、チームワーク組んで襲ってきたりして。

……危ない考えは止めよう。
フラグが立つ。

嫌な予感を抱きつつもナパークさんについて横路に入る……………。
……横路に入ったらそこはモンスターハウスでした、まる。

つてええええ！！
シヤレになんないって！

なんで入り口近くの横路にこんなにいるの？！

「誰か引つ掛けて逃げたか？」
「いえ、集めたのは良いけど倒しきれずに死んだらしいですね」

えっ？！

じゃあまさか、あの集団の中心には死体があつたり？

いやあああああ！

「マナーがなつてませんね」
「全くだ」

マナーの問題ちがう！
いや、マナーも大事だけでも。

「さっ、ミコト様」

さっ、じゃねーよ！

いやだよー。
死体とか引くつて！

後込みしてたナパークさんに背中を押された。
比喩じゃなくてマジで。

「ひいつ！」

【モンスター鑑定

コボルト（棒） レベル8

弱点 雷

ドロップ 布、糸、セレン草】

一斉にこちらを向くコボルト集団。
とりあえず、犬耳でした。
かわいくないけどね！！

それぞれに手にした棒を振り上げて襲ってくる。

あー、やっぱり二足歩行かあ。

武器持つてるモンスターと初めて会っちゃった。

とはいえ、動きはイエローハウンドよりも遅い。

思ったような知恵もないっぽい？

いつものようにただひたすら槍を振るう。

私はまだ攻撃力がないし、槍の技も知らないから一匹ずつやっていくしかない。

ナパークさんみたいに衝撃波が出せたり、リアマさんみたいに魔法がバシバシうてるといいんだけどなあ。

いや、打とうと思ったたら打てるかもしれないけど、二人が見てるからむりだよな。

「くっ！」

一匹の攻撃が槍を持つ右腕に当たった。

痛みで槍が強く握れない。

骨折まではいつてないけどヒビは、はいつたかもしれない。

左に持ち直す。

……訂正、こいつら小賢しい。

今までバラバラに攻撃してきたくせに、右腕に攻撃を集中させてきた。

慣れない左での槍使いと右腕を庇つての戦いは、正直辛い。

避けきれない攻撃が容赦なく傷を作り体力を削っていく。

「がっ……」

一匹背後に回られてた。

背中を打ちつけられては一瞬息が止まる。

振り向きざまに蹴り飛ばして壁際に背を付ける。

やばいな……。

痛みで集中力が途切れる。

左腕にも当たった攻撃のせいで力がなかなか入れられない。

コボルトの向こう側のナパークさんがじっとこっちを見ている。

昨日と同じように死ぬ寸前で助けにはいるつもりだろう。

冗談じゃない。

私は戦う力なんてたいしてない。

端から見たら私こそが雑魚だ。

でも、それでも……、

「私にだって意地ぐらいあるんだから……！」

叫んで気合いを入れる。

肺からも痛みを感じたけど今は忘れる。

『使えるものはなんだって使います。それが邪道であっても』

うん、知ってる。

「サンダー」

『争い中の迷いは死につながります』

うん、今まさに体感中。

「サンダーアロウ」

『閃きと決断を信じてきたから、私は今ここに生きています』

うん。

「サンダーウォール」

『いざとなったらどんな手を使っても、生きて抜いて下さい』

ごめんね、前はむりだったよ…。

でも、今生は…、

「サンダーレイン!!」

生き残ってみせるから、私の……

愛しい、人……。

いくつもの雷がコボルトを貫いていき、すぐに全滅して消えていく。

ざまあみろ。

「ミコト様！」

「ミコト嬢っ！内なる力より目覚めよ、ヒール」

痛みが癒えていく。

リアマさんありがとうございました。

「ミコト様、聞こえますか？」

聞こえてます。

でも、すごく眠いんです。

「魔力の使いすぎだ、眠った方がいい」

そうなんですか。

「見張りは私がします、リアマはミコト様の様子を見ていて下さい」
「ああ」

すみません、迷惑かけて。

だんだん白く霞んでいく意識の向こうで、誰かがよन्दる気がした。

私を呼んでるのは管理人様？
それとも、アナタ？

第十四話『邪道であつても』（後書き）

ミコトはこのあと二人になんて言い訳をするのか……。
今必死に考えてます！（マテ

第十五話【私がやばい】（前書き）

管理人様再び登場！

第十五話【私がやばい】

気がついたら白い世界にいた。

この白い場所には覚えがあるなあ。

「そうじゃろうな」

あー、管理人様だ。

なんだか久し振りな感じですねー。

「うむ、息災で何より」

すでに何回か死にかけましたが何か？

ってかここにいるって事は、私また死んじやつた？

ナパークさんたちに迷惑かまくりで、しかも目の前で死ぬとかなんて恩知らずなの？！

「いや、生きておる」

あ、よかったあ。

じゃあなんで？

「天がのう、ちと手を出した故…伝えに参った」

てん？

「天界の天じゃ」

手を加えたってなにをしたの？

「おぬしのよく知る人物をこの世界に送り込むらしい」

だれ？

「そしてなぜかソヤツに付随するようにもう一人おるようじゃ」

だからだれ？

「それはまだ言えぬのう」

なにその焦らしプレイ！

隠すんなら呼ばないで下さいよ。

「いやいや、ここからが本題じゃ」

なんなんですか。

「ソヤツらを見つければ、死ぬぞ」

……………は？

唐突すぎてわかんないんですけど。

「ふむ、実は同じ世界に送り込むために魂レベルでおぬしと二人を繋いでしもつてな」

ちよっ！

何勝手な事してくれてんの？

会えなかったらどうすんのさあ！

「大丈夫じゃ、天曰わく…ひかれ合っているから必ず出会う…らしい」

……それどこのマンガ設定？

「ときめ…げふんごほん」

おい……。

「ま、まあ…大丈夫じゃろう。あと期限は1000年じゃ」

意外と長い？

「うむ、天は3年といていたが殴…いやいや、脅しつではな…交渉と説得を繰り返した結果1000年になった」

………なんか天って立場弱い？

「そんなことはないぞ、天は唯一にして至高な崇敬すべき存在じゃ」
ですよねえ。

「うむ」

………で？

結局それが用事ですか？

「そうじゃ」

そうですか。

その人たちはいつ来るんですか？

「わからん」

は？

「死んでからでないと界渡りはできんのじゃ」

そうですか。

「まあ、送り込んだらまた呼ぶゆえ」

わかりました。

ってか……マジで誰ですか？

それはね、

!!!!

- *
- *
- *

ぬおあつ！！

「ミ ト う?」

なに?!なに今の?!

いきなり弾き飛ばされた?!

声?意思?とにかく何今の!

やばいつて、アレ。

なんか魂レベルでやばい!

「ミコ じょ!」

いったいなに?

まさかアレが【天】?

コワッ!マジ怖い!

「ミコト嬢!!」

「ひゃい!」

うー、こっちでもびっくりってなんなの今日…。

「大丈夫か?何度呼んでも返事がなかったから心配したぞ」

「えっと、大丈夫です」

鼓膜はちよつと大丈夫じゃないかもしれませんが。

「そうか、ならよかった」

ほつとした様子のリアマさんをみてちよつと罪悪感を感じる。

いやあ、夢の中でのことでびっくりしすぎて現実になかなか戻って

これなかったわ。

「頭痛や気分が悪かったりしないか？」

「大丈夫です」

「そうか、ずっとね」では、さっそくお聞きしたいのですが「…ナ
パーム、お前」

うつ…、聞きたいことはもしかしくなくても魔術のことですか？
魔術のことですね？

オーケー、言い訳を今から必死に考えるので猶予を下さい。

「ミコト様が昨日使った魔術なのですが」

猶予なかった！なかったよ！！

「魔術士でも特殊なアイテムもないアナタがなぜ使えたのですか？」

「ええと…、わかりません」

言い訳になってねえ！

後先考えずに魔術使った私のバカあ！！

いや、女は度胸だ、このままわかりませんで押し通す！

「あの時、何故魔術を使おうと思ったのですか？」

「…死にかけてて、倒すことに…死なない事に必死だったので覚
えてません」

死なない事に必死だったのは本当だし。

「そうですか」

うんうん、そうですね。

誤魔化されて下さい。

ってかこれ以上つっこまれたらボロがです！

「……まあ、ヴァンパイア族は精霊に近いと言われてますし…使え
ても不思議はないのですが…」

うんうん。

なんでもありのヴァンパイア族だもんね！

「しかし、媒介も無く魔術を使う人を初めて見ました」

あれ？なんか雲行きが…。

ここはやっぱり。

「……必死だったのではありません」

「まあ、そんな自殺行為するヤツは居ないな」

ん？ リアマさんからの援護射撃きた？

「制御が難しくなる上…消費魔力はやたらと増すからな」
「そうですね」

気を付けよう。

でも、媒介ってどんなのだろ？

リアマさんのはグラングリモアだよな？

ボーナス武器に似たようなのあるかなあ？

ステータス再振りと言じると頭の中に選択肢が出る。

武器……つと、本と杖があるのかあ。
たぶんこれだね、覚えておこう。

「下手に使うとミコト嬢のように丸一日寝込んだりするな」
「そうなんですか……つてえええ?!」

丸一日?!

数時間ではなく、丸一日寝てましたのこと?
そりゃあ、心配するよね……。

「毎度ながらご迷惑お掛けしてすみません」
「気にするな」

「そうですね、ただし今後はあんな無茶をする前にいつてください
ね」

………無茶をさせたのはあなたですよパークさん。
でも、ホントにボーナスポイント使ったのスキルと違ってチートな
んだなあ。

人前では気を付けよう。

「そうそう、雷の他になんの属性が使えますか?」

「あ、水と闇です」

「………ミコト様」

あれ?なんか頂垂れられた?
また変なこと言った?

「属性三つ持ちは、最高魔術士ぐらいです」

あ、あはは……いや、これはボーナススキルじゃないから!

生まれつきの才能ってやつですよ。

「修行に魔術も追加ですね」

「そうだな」

なんか修行項目増えてる？！

「リアマ、なにか媒介の予備はありますか？」

「……杖があるな」

「ではそれで」

「わかった」

ペンダント型のアイテムボックスから杖を取り出す。

でかいな……。

私の身長よりありませんかそれ。

【武器鑑定

杖レベル

星灯の杖

魔術攻撃＋15%、魔力＋10%】

うん、なんかこれが普通に思えてくる私がやばい気がするね！

第十五話【私がやばい】（後書き）

とりあえず、管理人様を活躍させたかったです（おい

第十六話【全力で回避します】（前書き）

魔術の練習もスパルタです。

第十六話【全力で回避します】

すごい今更だけどあえて言いたい。

ナパークさん、アナタただけスパルタなんですかつ！

魔術修行とかいって武器使用不可とか鬼すぎて泣けるんですがっ。

「サンダー！」

「もつと的を絞れ」

ついでにリアマさんも厳しかった。

「サぬダー」

「言えてないぞ、あと50匹追加だ」

うわーんっ。

残りコボルトのノルマ61匹に増えたああ！

只今魔術によるコボルトのガチンコ討伐中です。

しかもMP尽きたらまっずい薬飲まされて強制回復してます。

あげくの果てに、魔術はイメージの世界らしく呪文は好きなように
していいそうで…。

私はサンダーとだけ言ってる。

いつか無詠唱とかできるかもしれない。

ちなみに、長々というのはその方がイメージしやすいかららしい。

あと、医術技能には属性は関係ないらしいから使ってみたら一回だ

け使えた。

使った瞬間、リアマさんは頭を抱えてナパークさんはにっこり笑っていた。

うん、深く考えないでおく。

「サンダーッ」

いや、サンダーだと一匹ずつがほとんどだからサンダーレインとかサンダーウォールとか言いたいんだよ？
でもまだコントロール悪くて…。

「サンダー… あっ」

「…… 50匹追加」

たまにリアマさんやナパークさんに当たりかけるから禁止された。

「あと101匹ですね」

さらっと言ったあ！

これで通算何匹目よ？

レベルもわりとあがった気がする。

「サンダー、サンダー、サンダー」

うーん、マシンガンとかガトリングみたいに出来たらいいのに。

「サンダー！」

ガトリングだと何個も銃身がある感じだっけ？

「サンダー」

ってことはサンダーの束って感じ？

「サンダー！」

束かぁ。

「サンダー！って！！」

「なっ！」

結果、サンダーの束はガトリングではなくビーム砲でした、まる。
通常のサンダー10回分かな？

よし、サンダービームと名付けよう。

「ミコト嬢……………」

「えっと…」

あはは…、今で目の前にいたコボルト15匹ぐらい纏めて吹き飛ば
んじやった。

サンダービーム恐るべし！

「…………まあいいだろう、休憩にしよう」

やったぁ！

いい加減口がだるかったんだよねえ。

「休憩の後は上に上って残りのノルマ72匹と槍での戦闘訓練です
ね」

うわーんっ！

上がったテンションがた落ちだよ！！

ナパークさん、アナタは鬼だ！

さて、レベルも上がっただろうし、ステータス確認しておこうと。

【ミコトⅡカガリ

ヴァンパイア族 15歳 レベル9

属性：闇、雷、水

職業：棒術士レベル3、魔術士レベル4、会計士レベル5

控え職業：槍術士レベル4、製造士レベル1、拳術士レベル1、

医術士レベル1

所属：なし

所属ギルド：冒険者ギルド

所属奴隷：なし

装備：星灯の杖、回復の指輪、アイテムボックス腕輪型

常時スキル：暗視

任意スキル：鑑定、テレポート、闇魔術、水魔術、雷魔術、

槍技能、拳技能、棒技能、製造技能、医術技能、会計技能】

んー、変わったような変わってないような？

とりあえずレベル9になったかあ。

順調かな？

残り日数を考えてると目をつぶって休んでいるリアマさんとお茶を飲みながら何か紙に書き込んでるナパークさんが目に入った。

そういえばこの二人っていつ寝てるんだろう？

「お二人はいつ寝てるんですか？」

「ん？」

あつ、リアマさんが目を開けちゃった。

あつ！もしかして今まさに寝る気でした？！

ぎゃああつごめんなさいいつ。

「ミコト様が寝ているときにちゃんと交代で寝ていますよ」

「ああ」

そうかあ、よかったあ。

……… って！それ睡眠時間足りてくない？

「それ、ちゃんと寝れてませんよね？」

「いや、6刻は寝てるぞ」

「私もしつかり寝ていますよ」

あれ？

6 + 6 ? || 1 2。

え？

「…あれ？今って三日目ですよね？」

「いや、四日目の半ばだな」

あれれ？

なんか時間ずれてる？

「ミコト様は寝ると16から18刻ほど寝入ってますよ」

ちよっ！！！

「まあ、ヴァンパイア族にしては少ないな」

「はい、ミコト様にお会いするまでは、いったん寝ると24刻以上寝ている種族だと思っておりました」

それってどこの眠り族？

「その代わり起きるとしばらくは寝ませんね」

でも私は普通に寝て……ないかもしれない。

初日は頭使いすぎでダウンに近かったし、次は死にかけてダウン、その次も死にかけてダウン……。

うん、まともにオヤスミって感じじゃないし。

「さて、食事にしましょう」

いつの間にか、また味けのないサンドイッチもどきが目の前に……。お塩とコシヨウプリーズ！！

「……………」

いや、実際そんな事言えないけどね。

お世話になってる身だし。

はあ、味が薄くて食が進まな……。てか、なんか今日の渋いし苦い

気がする。

「味がおかしい」

うん……つて、え？

リアマさん？

「ナパーク、何を入れた？」

「ミコト様が味が薄いと感じていらっしやるので、リバトを足してみました」

リバト？

「リバトはモンスター除け用の香草だろうが！」

ちよっナパークさん！ なにいれてんですか！

「一応食べれますが」

「普通は食べん！！」

すっごく不思議そうに言ってくるナパークさんが、むしろ不思議です。

「でも彼は食べてましたよ？」

「あれは、乾燥させて粉末にしたもので生で食べたたんじゃありません！」

「変わりませんよね？」

「じゃあお前は生の草を食べるのか？」

「必要なら」

食うのかよ！

あつ、でも元の世界でも葉物とか普通に生で食べるか。

「……もういい」

リアマさん、なんかお疲れ様です。

「次からは変な物を入れるな」

「ミコト様はそれでよろしいですか？」

え？私に話振るの？

「はい…今までのでいいです」

敢えて言うなら塩胡椒希望です！

「味が薄いのでしょうか？」

「……えーっと」

バレてた。

「彼…、知り合いのヴァンパイア族も薄いといってましたから」

「そうなんですか」

ヴァンパイア族って濃い味派？

「なにかご要望はありませんか？」

「……えっと、お塩とかがつてありますか？」

「オシオ？」

「舐めるとしよっぱいんですけど…」

あ、すっごく考え込んでる。

「…又タの体液はしょっぱかった気がします」

体液って……。

思わずリアマさんを見る。

「食品を保存するとき、その体液に漬ける地方がある…とは聞いたことがあるから、食べれなくはないかもしれないな」

ひいっ！

「では、次回は又タの体液に浸してみます」

「えっ！」

「お任せください」

やばい、どうしよう。
死亡フラグっぽい。

「次は私が作るから手を出すな」

「……私も手伝います」

全力で回避しよう！

第十六話【全力で回避します】（後書き）

ナパークの知り合いのヴァンパイア族の男…、本人はいつ登場するんだろう？

第十七話【うっざぁ】（前書き）

ライバルになってないライバル登場のまきw

第十七話【うつぎあ】

「ウォーむぐっ」

お約束通り4Fで残りノルマを果たすべく、レベルが11にアップしただけのイエローハウンドと魔術でタイマンしてたらナパークさんにいきなり口を塞がれた。
ちなみに雷から水魔術に訓練内容がかわってる。

つか何事？

「杖をしまつて槍を装備して下さい」

は？

「早く」

なんか焦った感じだったので言われたとおりにする。
ナパークさんは槍を装備したのを確認してから、やっと口から手を離してくれた。
なんなんですかいったい！

「ミコト嬢、こっちに」

残ってたイエローハウンドを水魔術で殲滅してたりアマさんが背後に回るように言ってきたので、訳の分からないまま言われたとおりにする。

いや、まじ何事？

あと15匹でノルマ達成なのに！

「おや、誰かと思えばチャゲリット家のご子息でしたか」

私たち以外の足音がしたと思ったら、ナパークさんがわざとらしく声を上げた。

「ちゃげりつと家…？」

「おや、ナパーク支部長殿でしたか、リアマ支部長殿も一緒にとは…奇遇ですね」

リアマさんの後ろから覗き見たら、生意気そうな少年が取り巻きを連れていた。

わっがままそうなヤツ。

関わりたくないタイプなのでリアマさんの後ろにへばりつく。

「5階層までは立ち入り禁止にしているのですが、迷われましたか？」

そうなんだ、どおりでだれにも会わないとおもったあ。

「いや、ナパーク支部長殿がダンジョンの低階層を封鎖してまで弟子の修行をしていると聞いて見に来たんです」

それって全然奇遇じゃないし。
はかなの？まぬけなの？

「そうでしたか」

あ、ナパークさんの機嫌下がった？

「では用事はお済みですね、お引き取り願えますか」

うん、下がってるわあ。

「いや、せっかく来たのだから紹介ぐらいして欲しいですね」

誰も来てくれなんて言っていないし。

つか空気読め。

「リアマ支部長殿の後ろに隠れているお嬢さん、はじめまして。グラブ＝チャゲリットといいます、同じ修行中の身ですし今後ともよろしく」

はあ？

修行中の身い？

お前幾つだ。

【個人鑑定

クラブ＝チャゲリット 19歳 男 レベル15

職業 剣術士レベル7

所属ギルド なし

称号 なし】

【個人鑑定

レン 25歳 男 レベル36

職業 剣術士レベル18

所属ギルド 冒険者ギルド
称号 なし】

【個人鑑定

スレイ 18歳 男 レベル28

職業 製造士レベル14

所属ギルド 職人ギルド

称号 なし】

【個人鑑定

ガルメイ 21歳 男 レベル22

職業 奴隷

所属ギルド 奴隷ギルド

称号 なし】

……… 思わず鑑定して後悔した。

19歳かよっ！

つか奴隷きたあああっ！！

「……… キミは口がきけないのか？」

「彼女は人見知りか激しいもので」

「そうですか、で…名は？」

言いたくないなあ。

ここで名乗ったら今後つきまとわれたりとかさあ。

「……… ナパーク支部長殿の弟子は随分な礼儀知らずなようですね」

はあ！？

カッチーンときた。
おまえが言うか？

「ミコトです」

ほら、名乗ってやったんだから消えろ。

リアマさんの後ろから睨みつける。
がつつり目があった。

「へえ」

うわっなんか興味もたれた？
やばっ。

「今度こそ用は済んだでしょうからお引き取りを」

速攻でリアマさんの後ろに隠れましたが何か？
ついでにナパークさんが取り巻きにプレッシャーかけ始めてますが
何か？

「いや、せっかく来たんだ共に修行をどうですか？」

だが断る、とつとと消える。

ほら、取り巻きも帰るように言ってるじゃんか。

「聞こえませんか？お引き取りを」

ナパークさんがんばれ！

「……いや、でも」

「この私が私の権限で立ち入り禁止にしている場所に何時までいる気ですか？」

「くっ……わかった。帰るぞ」

憤慨した様子で去っていくスネ夫…基、……………名前なんだっけ？

「相変わらずしつこい子供だな」

「まったくです」

はて？相変わらずってことは毎回のこと？

「あのなミコト嬢、あのガキは【双牙のナパーク】に憧れてて、よくギルドや自宅に押し掛けてきて弟子にしろとうるさいんだ」

はー、うっざい。

つか【そうが】ってなんぞ？

「ちなみにチャゲリット家はこの街で一番というか、殆どその系列なんだが…でかい被服屋でな…」

あー、親に言いつけるとかいつちゃうマジ馬鹿息子なんですな。

めんどくさいなあ。

「一応ナパークの弟子になったミコト嬢にも絡んでくるかもしれないな」

うざー！

ものすっくううざあ

今後の生活のテンションさがるなあ。

「少し早いですが、5Fにいきましょう」

なんでさ！

「そうだな、いくら護衛を付けていても5Fには来ないだろう」

それはなぜですか？

首を傾げたらナパークさんが笑顔で教えてくれた。

「5Fはレベル16と一気に上がりますから」

ひっ！

「ではサクサク行きましょう」

いやあああつ！

それ死亡フラグっばいからあつ！！

第十七話【うっざぁ】（後書き）

速攻で名前忘れられていますw
でも今後の展開に必要な子です。

第十八話【やっぱり型破り】（前書き）

闇魔術って難しい。

第十八話【やっぱり型破り】

そして、ビクビクしながらの5Fでの修行開始です。

ちなみに私のレベルは11になってる。

どれだけイエローハウンドを倒したてかは察して……。

ナパークさんが言うにはギリギリいけるらしいんだけど……。

どう考えても死亡フラグだからっつ！！

5Fに上がる直前にポイント再振りしたのは間違っていないはず！
選んでは確認し、直しては確認し……とかしてた間すっごい怪しかったらうけどねっ。

【ミコトIIカガリ ヴァンパイア族 15歳 レベル11

属性：闇、雷、水

職業：棒術士レベル5、魔術士レベル5

控え職業：槍術士レベル5、拳術士レベル1、会計士レベル6、
製造士レベル1、医術士レベル1

所属：なし

所属ギルド：冒険者ギルド

所持奴隷：なし

装備：星灯の杖、回復の指輪、幸運のペンダント、鋼のブレスレット、月夜のブローチ、アイテムボックス腕輪型

常時スキル：暗視

任意スキル：鑑定、テレポート、闇魔術、水魔術、雷魔術、槍技能、拳技能、棒技能、会計技能、製造技能、医術技能】

第三ジョブとテレポートはずしてアクセサリ装備につぎ込んでみた。

あと、ポイントが10増えてたからそれもアクセサリ装備に当ててみた。

【装備品鑑定

首飾りレベル 幸運のペンダント

運 + 20、致命打率 + 15%、回避 + 5%】

【装備品鑑定

腕輪レベル 鋼のブレスレット

物理防御 + 50】

【装備品鑑定

胸飾りレベル 月夜のペンダント

魔法攻撃 + 30%、魔法防御 + 10%、魔力 + 20%】

…………… なにか問題でも？

* * *

「ナパークさんっ！これ本当に倒せるんですか？！」

「大丈夫です」

「ミコト嬢、がんばれ」

大蛇を前に思わず叫んだらさっさと返された。
いやいや、私の身長以上有りますけど！！

【モンスター鑑定

イエロースネーク レベル16

弱点 火

ドロップ 蛇皮、牙、蠟、鉄】

なんで蛇が蠟とか鉄を落とすの？！っていう突っ込みは置いておこう。

魔術の修行のノルマはあと16匹、つまりこれを魔術で16匹……。うん、マジで死ぬかも。

「ミコト嬢、ここからは闇魔術だけでいってくれ」

リアマさんっ、なんか無茶言ってますか？！

闇魔術とか使ったことない上に、イメージわかないんですがっ！！

「ちなみに、失敗と標準が外れたら50匹追加だぞ」

あんたも鬼じゃあああ！！

うっ、闇…闇ってなに？ ブラックホール？

いやいや、ないって。

陰？ どう魔術にしろと…。

いや、思い出せ私っ！昔やったゲームでそんなのがあったぞ！

えっと闇の針で陰を縫いつけるんだっけ？

となると……。

「闇の針よ、敵の影を縫い止め動きを封じよっ、ソウシャドウ！」

目の前に現れた極太の針が大蛇に向かって飛んでいった。

「やった！」

見事に影に深く刺さって縫いつけることが出来たらしく、大蛇は動けなくなっていた。

でもだんだん抜けてきてるから早く攻撃しないと。

えっと、闇の針をいっぱい大蛇に当てる感じ？

「ダークニードル！」

さっきと同じサイズの闇の針が大蛇に刺さった。

うん、極太とは言え針だもんねっ大してダメージ受けてなさそう。

イメージ、イメージが大切。

針じゃなくてもっと大きな塊だったら？

「……ダークボール」

バスケットボールぐらいの闇の塊が出現して命中した。
今度はそれなりにダメージがいったみたい。

よし、動けてないうちに当て続けよう。

「ダークボール、ダークボール、ダークボール、ダークボール、
ダークボール、ダークボール、ダークボール、ダークボール、ダーク
ボール」

10発目を当てても死なない。

くっそう…。

やばっ針が抜けそうだし！

「ダークボール、ダークボール、ダークボール、ダークボール、ダ
ークボール」

まだ倒れないっ、針がマジ抜けるって！

「ダークボール、ダークボール、ダークボール、ダークボールつい
い加減死んでよ！ダークボール！！」

針が抜ける瞬間、20発目にしてやっと倒れた。
危なかったあ。

ホッとしていると目の端に何か動いたのが見えた気がした。

——ゴッ。

「くうっ」

まだ大蛇は生きてて、尻尾を振り払って攻撃してきた。反射的に杖を楯代わりにしなかったらヤバかったかも。

杖を構えながら様子をつかがう。

尻尾は動くけど頭のほうは動かないみたい。

もつと攻撃力の高いのじゃないとダメ？

闇の刃とか出来るかな？

「ダークカッター」

30センチ位の三日月みたいなのが現れた。

「切り裂けっ！」

振りあがった尻尾が見えたので、とっさにそれをつかんで思いっ切り投げつける。

尻尾がきれいに切れた。

ダークカッターすごいっ！！

調子に乗ってダークカッターを連続で投げつけて大蛇を切り刻んでいく。

5回ほどダークカッターを投げつけたら白くなって消滅した。

大分魔力が無くなった気がして、思わずその場にへたり込んえしまう。

し、しんどいわ。

これをあと16匹？

なんてムチャな……。

「「はあ……」」

ん？ため息が背後からも？

振り返ったらリアマさんが魔力が回復するまっずい薬を持って立っていた。

やっぱり飲むんですね…。

「ミコト嬢、普通魔術で作成したものには触れられないぞ」

え……？

触りましたけど？

「正確には、触れると自分にもダメージがあるので触らない」

……… まじですかっ！！

「はあ、ミコト嬢はとことん型破りだな」

それは具体的になんなのか聞いたら終わりなきがしますねっ！

「まあ、私としては多少ハラハラしますが、全体的に微笑ましいですよ」

「それはお前も型破りだからだっ！」

あー、ナパークさんってやっぱり型破りなんだ。

第十八話【やっぱり型破り】（後書き）

型破りな師匠（保護者）に型破りな弟子。

【閑話】とある道化（前書き）

始めに言います、読みづらいです。

【閑話】とある道化

やあやあ、ご機嫌よう。

ワタクシは名無し、名無しの道化。

と、呼ばれていた道化ですよ。

今はもちろん名前があります。

お方様に頂いた名前です。

知りたいですか？

では代償はアナタの命でいいですよ。

あはは、冗談です。

いや、かつてのワタクシなら本気でしたが、今のワタクシでは「冗談」です。

ワタクシの名前はコーディ。

今は主を待つ哀れな道化です。

* * *

「私の道化よ、頼みがある」

ああ、またご主人様のご病気だ。

「私を殺してくれ」

「いやですよご主人様」

お方様が亡くなってから何度目のご病気でしょう？
ご主人様は人に弱みを見せられない、だから道化の前でご病気になる。

ああ、お方様。

こんなご主人様を置いていってしまうとは、アナタはなんて愚かなのでしょう。

*
*
*

ご主人様ですか？

強く気高く冷静で、哀れで愚かで不幸な人でした。

え？あんまりな言いよう？

そうですか？

ワタクシは奴隷ではなく道化なのでしかたがありません。

* * *

「お方様、お方様」

「ちよつとコーディ、すごく臭いがきついんだけど？」

そうでございましょうね。

今し方人を殺めて参りましたので、さぞかし血の臭いがきついでしょう。

「お方様、コーディは旦那様の御命令を遂行しました」
「そうなの？」

お方様を傲慢なやつらから御守りいたしましたよ。
だからお方様のお声を聞きたくなったのです。

「」苦勞様」

いえいえお方様、ご主人様とお方様の為ならばこの道化、ある一つをのぞいてはどんなことでもいたします。

* * *

お方様についてですか？

優しく強かで逞しく、狡くて残酷なお方です。

あはは、確かにひどい人でしたが、優しいお方でございました。

* * *

「もう私を守らなくて良いよ」

「何をおっしゃいますか、お方様」

「ここを出て行くから、コーディはあの人の傍にいて」

ああ、お方様。

それはなんと残酷なのでしょう。

ああ、この身が二つに別れればいいのに。

そうなれば、ご主人様もお方様も御守り出来るのに。

*
*
*

お方様がお亡くなりになったのはそれから半年後で御座いました。
傲慢な者のせいで亡くなったお方様は愚かですが、あの時逆らって
でもお方様について行けなかったワタクシは更なる愚か者です。

*
*
*

「私の道化よ命令だ」

ああ、旦那様。

ついにワタクシにその御命令をなさるのですね。

なんと残酷なのでしょう。

ご主人様もお方様もなんと酷いお方なのでしょう。

「私を死なせてくれ」

「承知しました、旦那様」

*
*
*

毒を呷る旦那様を前に、ワタクシは何もせずにはいました。
死なせてくれ、と命令されましたから。

まったくもって酷いご主人様だともいませんか？
守るべき存在の死を二度も味わらせてくれたのです。
痛みも麻痺していたはずのワタクシが胸に走った痛みのあまり狂い
そうになったほどでございます。

* * *

ご主人様の冷えた骸の前に跪いて、どれほどの時間が過ぎたことでしょうか。

ご主人様の私室に乱入してきた小僧がなにか喚いています。
そうですね、もうよいでしょう。

ご主人様は無事に願いを果たされた。

「あまりにも悲劇なる幕引きに不用な演者はどうぞお引き取りを願います」

ああ、小僧が息をのんでいます。
そっぴえばご主人様とお方様以外の前で声を出すのは初めてでしたね。

「主を失った道化は素早く舞台の上から退場いたしましょう。それでは、さようなら」

頭に当てた銃の引き金を引く。

ご主人様、ワタクシは地獄までも、どこまでも……、お供致します。

叶えてあげる

君の魂を繋げてあげる

今度こそ共に生きていける世界へ、いっておいで

探すんだ、見つけるんだ

待ち続けて出逢うんだ

君の、魂の主

* * *

そんなわけで、ワタクシは此处で主を探し、待ち続けているのです。ですが自ら動き探すのは、ヴァンパイア族の身ではあまりにも難しい。

ですから、アナタの望む実験にはいくらかでも御協力致しましょう。

その代わり、条件です。

ワタクシの主を探し出して来て下さい。

簡単な条件でしょう？

できますよね、ナパーク。

【閑話】とある道化（後書き）

ついに登場な彼ですw

なんでミコトより後に死んだのに先に転生してるのかは次で判明します。

【閑話】いたずら（前書き）

内容は薄いです。

【閑話】いたずら

「いやあああああつ、こんのクソ天があああああ！……！！！！！！」

白い空間に広がった絶叫。

「抜かった、甘く見ておったのう」

追随する溜め息もやけに響いた。

油断大敵だよ

「「アンタ（オヌシ）が言うなっ！」」

今、この白い空間に居るのは何か板のような物を必死に操作しているミコトの前世界の管理人と現世界の管理人。そして、白い紐のようなものでグルグル巻きにされた【天】であった。

「あああつもうそっちにいつちゃってる〜！」

「くっ、流石に【天】の干渉をキャンセルは出来んの」

現世界の管理人はキャンセルから修正へと換えるべく操作を始め、前世界の管理人は【天】がこれ以上何もしないように睨みを利かせ

ている。
もつとも、効果のほどは期待できないが…。

* * *

さて、ここで【天】が何をして二人の管理人が慌てているのかを説明しよう

いつの間にか白い紐のようなものから抜け出した【天】が高らかに声を上げた。

「「は？」」

【天】は今回の界渡りであるミコトに興味をもち、彼女の一生を読んだことからはじまったのである

「今度は何を始めたのかのう」

「さあ？今のうちに修正しちゃって」

「それもそうじゃな」

管理人の二人は気にしないことにしたらしい。

彼女の悲劇と彼女の周りの妄執は【天】が干渉してもよい、と思えるほどのオモシロサであつたのです

「むっこれで……なんとか」

「もう一人行つたわ」

「まて、今手が放せぬ。引き留めてくれ」

故に【天】は彼女に関わり深い魂を死後同じ世界に送ることにしました、オマケの子もついでに送るといふ親切設計でした

「あゝ！」

「なんじゃ？」

「引つ張つて行かれた」

「くっ、変な演説で気がそれていると思うたのに」

優しい【天】は出逢いを劇的にするためのちよつとした時間制限を設けようとしたのに、意地悪な管理人二人に邪魔されてしまったのです

「意地悪つて我らかのう」

「そつちに気を取られてないで！」

「う、うむ」

ですが【天】は諦めません。二人の隙について新たに魂を送り込む【時間】を操作したのです…そうつ！彼女が生まれるよりも以前の時代に生まれるように！！

「なんかイラつとするわ」

「うむ」

二人の管理人はそれに気がつき今現在必死に時間があまり離れないように操作しています

「なんかものすごくイラっとするわ」

「我もじゃ」

ちなみに、二人が頑張って時間が離れないようにしたのも、既に確定していたことで【天】からしたら脚本を持っている舞台を見ているような感じなのです

「…………ヤルワ」

「止めぬぞ」

* * *

「…………で？」

軽く息が上がった前世の管理人が、なんだか面積が1・5倍になった【天】から手を離して現世界の管理人を振り返る。

「【従者】は15年前、【伴侶】は5年前じゃな」

白い板を見つめながらそういうと、現世界の管理人は深いため息を吐く。

「我はミコトになんと言ったら…」

「そのまんまいったら？」

「……【天】のイタズラで魂を繋いだ者が少し前にすでに生まれておる…などと言ったら罵られそうじゃ」

うなだれる現世界管理人に誰かが手をさしのべる。

頑張れ

「おぬしが言うなああっ！」

* * *

「と、いう訳じゃ」

（は？天ってそんな身勝手なの？それでいいの？……うわっ管理人様哀れすぎっ！苦労してるんだなあ）

再びミコトの夢に現れ状況を説明したら罵られはしなかったが、物

凄く哀れんだ目で見たらしい現世界の管理人。

それはそれで大ダメージだったらしい。

【閑話】いたずら（後書き）

もしかしたら後日こっそり修正してるかもしれません。

第十九話【油断は禁物】（前書き）

ミコトはさくさく倒してるように見えてますが割りと苦労してます。

第十九話【油断は禁物】

レベル16の敵は強かった…。

うん、ちよつおまつ！ばかじゃねーの？！つてぐらいに強かった。だがしかし！

いつまでもそれに怯んでいる私ではない！

ソウシャドウとダークカッターでサクサク倒してしていく！！

……つもりでした、さっきまでは。

うん、魔術がうまく使えるようになったからって油断は禁物だよね。油断してるから…。

「魔力切れとかマジかんべん～～～～！！！」

こうして魔力切れになって必死に大蛇の攻撃から逃げ回る羽目になってる。

ちなみに、リアマさんとナパークさんに助けを求めるために目を向けたらめっちゃ笑顔だった。

50匹追加ですね、わかります…。

うふふ、あと5匹からあと55匹に増えてもいいんだ、何時終わるのかわからない修行でもいいんだ…。

ずっと残り一桁になるとノルマが増えてる不思議が続いてるし…。

油断？！やっぱり油断なの？！

うん、まあ何はともあれ…とりあえず、助けてええええ！！！！

尻尾や体当たりに噛み付き攻撃しかない大蛇でもその巨体から繰り

出される攻撃は危険すぎる。

「ひいつ！」

今かすったよ！

尻尾が腕をかすただけで腕がしびれてるよ！！

左腕だから杖を持つのに支障がないけどまじこわいつ！

「よく逃げるな」

「独楽鼠みたですね」

「いや、そうでなく…助けないのか？」

「そうですね、魔力切れで相手する経験を積むのもいいかと思ってるのですが」

「そうか」

そうかじゃないです！

そこは全力で助けて欲しいです！！

ってそんなこんなで逃げ回ってるうちに魔力が回復したっぽい。

回復の指輪様々だね！

「ソウシャドウ！」

逃げながら魔術を使うのって割と大変かもしれない。

自分が動いてるせいでなかなか標準が定まらないんだよね。

そして案の定失敗…。

「追加50匹、残り105匹ですね」

うわーん！！

「ソウシャドウっ！」

今度は成功して動きを封じられた。
立ち止まって息を整える。

いや、マジ息切れだね、20分ぐらい全力で逃げ回ってたし！！

よしっ！

「ダークカッター10連！」

ダークカッターを10枚同時に出すと杖を構える。

「細切れるおおっ！！」

一枚ずつ大蛇に向かって杖で打った。

いや、だって触れるとダメージってリアマさんが言ってたから触らずに杖で打ってみてる。

これもリアマさんにあきれられてたけど気にしたら負けなんだよきつと。

「なぜ壊れないんだ…」

「そうですね、なぜ未だに壊れないのかが不思議ですね」

「そもそも、魔術を杖で打ち出すなんて聞いたことがない」

「撃ちだすのなら聞きますけどね」

「他の魔術士や魔術使いが知ったら騒ぐだろうな」

「そうですね」

「本当に、なんで魔術士ギルドじゃなく冒険者ギルドなんだろうな」

そういえば、なんで魔術士ギルドに行かなかったのかってリアマさんに聞かれてたっけ？

まあ、魔術士ギルドって常識だとお高くとまっていたやみなエリート集団ってイメージだったからなんだけど…。

あやふやにして答えてないんだった。

でも今にして思えば国家に仕えるとか税金高いとか…めんどくさそうだね。

うん、冒険者ギルドにしててよかった。

もし魔術士ギルドだったらこんな親切受けなかったかもしれないしね！

最後の一刀を打ち出して大蛇が死んだのを見届けると落ちていたアイテムを拾う。

しかし、なんで蛇が蛹を落とすのかなあ？

そんな疑問を抱きつつもアイテムボックスに放り込んで置く。

アイテムボックスもだいたいぶたまってきたような気がする。

というか、片付いてない部屋みたいな感じになってる気がする。

欲しいものを念じて取り出せばそれが出てくるし、なにが何個入ってるかもアイテムボックスみればわかるんだけど…落ち着かないんだよね、こういうの。

「ナパークさん、休憩を要求します！」
「だめです」

即答?! 即答ですか?!

アイテムボックスの整頓とか服の修繕とかしたいのですよ?!

「休憩した時間だけ後のノルマが増えてもいいならいいですよ」

「どんどんいきましよう!」

うん、まだアイテムボックスには余裕があるし服もあとで直せばいいよね!

とりあえず今はまだ一匹ずつしか相手にできないのが問題だなあ。

効率悪いんだよねえ…。

でもあれが何匹もいたら死ねる。

どうやったら効率よく倒せるかなあ。

ソウシャドウで動きを止めてダークカッターで切り裂く… 以外の方
法。

もっとダークカッターの威力が上がればいいんだけど、もっと大きい刃にする?

「ダークカッター」

うー、難しいなあ。

出来るだけ大きなダークカッターを目の前に出して手に取ってみる。
80センチぐらいになったけど魔力の消費も激しいな。

しかし、改めてみると禍々しいなあ、この刃。

やっぱり闇魔術だからかなあ。

闇っていえば割りとなんでもアリだよねえ、疫病とか毒とかも闇属

性っていえば闇属性？
いやいや、微妙だよねえ。

あー、HP吸収とかMP吸収とか闇っぽい？

あっそれよくない？

MP吸収できたら私のMP切れもなくて打ち放題！
でもどうやったらMP吸収できるかな？

「み、ミコト嬢…」

ん？なんですかリアマさん。

ダークカッターをマジマジと見てますが興味があるんですか？

「いつまでそれを持ってるつもりだ？」

それ？ダークカッターですか？

……………あ。

しまった、ダメージ食らうから普通はさわらないんだっけか！
つい触ってたよ！

「いえ、そのつどうやったらこの刃にHPとMPの吸収機能がつけられるかなあって…おもって、まし…た？」

言っててやばいと思ったんだ。

今は後悔してるよ、うん。

「ミコト嬢…それはいったいどう考えたらそうなるんだ」
「いえっ冗談です」

リアマさんの態度から吸収とかはないんだな、うん。

「それは面白そうですね、魔術士ギルドでそんな研究をしてましたね」

「え」

あるんだ。

なるほどなるほど、脳内メモに記録つと。

闇魔術につけられるかなあ。

吸収となればHPアブソープとMPアブソープ？
うーん、アブソープだけでいいのかな？

「あ、次のモンスターですね」

「……………なんかボスっぽいんですけど」

「ボスですね」

ですね、じゃないから！！

さっきのイエロースネークの5倍長いですよ？！太いですよ？！

つかいつの間にかこの広い空間に来たんですか？

人が必死に考え事してる間になにがあつたんですかつ！

「がんばってください、ボスなので魔術と武器の併用も許可します」

いやっ、それでも勝てる気がしないんだけど！！

しかしナパークさんは鬼だ…。

本気だ、間違いなく本気で戦えといっている。

ちょっと涙が溢れそうになりながら蛇に向かい合う。

【モンスター鑑定

ダークスネーク レベル18

弱点 光

ドロップ 蛇皮、大牙、鉄、蠟、オブシディアン】

レベルあがってる！ものスッゴクあがってるよ！！

第十九話【油断は禁物】（後書き）

いよいよボス戦です。

戦闘描写が苦手なのでどうなるかわかりませんが…。

第二十話【おなかすいた】（前書き）

食欲魔人あらわる。

第二十話【おなかすいた】

「ソウシャドウ！」

ありったけの声で叫んで影に針をさしてみるけど、巨大だからなのかあんまり止める時間は長くなさそう。

「ダークカッター10連！」

動きを止めている間にどこに攻撃をするのが効率的かを見極める。どんな生物にだって急所があるはずなのだからそれを狙えばきっと今の私でも勝てるに違いない。

急所…人間で言えば眉間とかだけど蛇だとどこになるんだろう？
やっぱり目かな。

「10連投、いっけえ！」

杖で目を狙って一気に打ち出す。

10枚のうち5枚は狙い通り目に当たって、残りの5枚は顔や身体に当たってそれなりのダメージを与えてる。
いい感じかな。

さらに10枚だして今度は口を狙って打ち出してみるけど口を閉じられて顔を切り刻むしかできなかった。

むうう、だからといって槍に変えて直接攻撃するのはまだちょっと怖い。

こここのところ魔術しか使ってなかったから余計に槍での勘が鈍ってるような気がするしなあ…。

どうしたものかと考えながらダークカッターと打ち続けるとなんとなく魔力が尽きそうな気がしてきた。

これだけ魔術を打ち続けてると魔力の残量がわかるようになってくるなあ。

しかし、本当にどうしよう。

魔力が回復するまではやっぱり槍での攻撃に変更するしかないのでハルバートを取り出す。

久しぶりに握った感じがしたけど意外と手になじんでくれる。

これならいけるかな？

それにしても、こんな巨大な蛇にこの大きさの槍って効果はあるのかな？

そんな風に思いながら槍を構えて巨大な蛇に突進する。

槍の基本は突くことだからまずは突いてみよう。

……って思ったんだけど直前で方向転換をして槍を高飛びの棒代わりにして巨大な蛇の……言いにくいなあ黒蛇の頭の上に飛び上がって着地する。

意外とうまくいった。

私ってばやれば出来る子じゃん！

さて、どうしてこんな行動をとったかといえば……。

「わわわっ！」

ソウシャドウの針が抜ける寸前だったので攻撃をよけるために飛び上がりました。

うん、とつさの判断グッジョブ！

黒蛇も頭上にはなかなか攻撃できないのか身体をうねらせて私を振り落とそうとするけど予備の槍…これもハルバート…を黒蛇の頭にさしてしがみつく。

うん、痛みで余計に暴れられてこっちもさらに必死にしがみつかないといけないのは計算外だったわ…。

でもこのまま魔力が回復するのを待つて魔術を近距離で打ち込むことも出来そう。

あ、でも何がいいかな？

ダークカッターは距離関係ないし…サンダー？

しがみついているハルバートを見つめる。

避雷針みたいにここに落とせば体内に電流を流し込めるかもしれない。

振り落とされそうになるのを必死に耐えて魔力が回復するのを待つ。視界の端にナパークさんが短剣に手をかけてるのが見えた。

やばい、ここで手を出されたらノルマが増える…！

「ナパークさん！まだ大丈夫です！」

とつさに叫んでしまった。

助けてくれようとしてるのにごめんなさいっ…！

でももうちょっとがんばるんでっ！

つてかもうこれ以上ノルマ増えるのいやなんですっっっ！

そんなこんなで必死にしがみついているうちに魔力が回復したようなので頭の中で必死に避雷針を思いだす。

イメージは木に落ちる落雷、雷の発生源は私だ！

「雷よ落ちて流れ内より破壊せよ、サンダー！！」

しがみついた手から雷が放たれてハルバートを伝い黒蛇の体内に入り込んでいく。

感電って怖いんだからね！

手を離し体表を蹴って黒蛇から飛び降りた。

「ぶあっ」

高いところからのジャンプはやはり足に相当なダメージで、着地と同時に踏み外して顔から地面に激突した。
もうちょっと華麗に着地したかった。

そうだった黒蛇はどうなった？！

あわてて立ち上がって振り返ったら感電した成果うまく動けないでいる姿があった。

死ななかったのか！！！！

しかしのた打ち回ってる身体と頭に刺さったハルバートがなんとも間抜けすぎて笑いそうなんだけど…。

そんな事を言ってる場合じゃないってわかってても笑いそうになっ

ちゃじゃんか！

さて、これでも死なないってことは雷に耐性があるのか私の魔術の威力が低いのか…。
後者かなあ？

どうしよう…。

高跳び棒の代わりにしてたハルバートを拾い上げて構える。

やっぱり剣にしておくべきだったかなあ、そしたらかつこよく真つ二つ！とか出来たかもしれないのに。

槍じゃ串刺しぐらいだね…。

黒い蛇の串刺し…。

……………考えてたらうなぎが食べたくなった、ってかおなかすいた！

蛇って食べれるかなあ…。

お腹の辺りならお肉も有りそうだし脂肪も乗っておいしいかもしれない？

ついつい目が腹部に固定される。
消滅する前に肉を剥ぎ取れば…。

はっ！しまったつい食べる方向に考えがいつちゃった！
まずは倒すことを考えようよ私！

「ダークニードル特大！！！！」

叫んで開いた口をめがけて投げつける。

投げつけた勢いで頭部ごと壁に刺さってくれた。

うん、なんかますますうなぎっぽい。

「ダークカッター特大！！！」

でっかい鎌の刃のようなカッターの端をもって回転をいつもよりも多めに加える感じで投げつけた。
いつもは横回転だけど今回は縦回転で！！

「よっしゃ！」

予想通りに串刺し状態の黒蛇のお腹が綺麗に縦に裂かれた。
ちよっとグロイかもしれない…。

でも見えたお肉はやっぱり脂が乗っておいしそう！！

ハルバートをもって突撃する。

もちろんソウシャドウで動きを止めておくことも忘れては居ない。

「うふふふふ、さあ黒蛇ちゃん。そのお肉をお姉さんにおよこしなさい」

飛び上がって横から槍を突き刺して重力に逆らわず刺さったまま下に落下する。

「ふんぬっ！」

締めめに槍を払って肉の部分をちぎりとった。

巨大な大蛇なだけあって取れた肉の量が多かった。

これだけあればばらくお肉に困らないかもしれない。

うふふふ、この肉を焼いてタレ…いや塩でもいいや、白焼きにして食べたらどんな味がする…。

…

…

…

うぎゃあああああ！

しまった！食欲に負けてついやってしまった！

ナパークさんかリアマさんに味のことを聞いてから採取するべきだった！

ってそうじゃなくて！

食欲のあまりつい我を忘れて倒しちゃったよ。

空腹恐るべし。

振り返ったらダークニードルは突き刺さったままで黒蛇が消滅していた。

その下には切り落とした肉とドロップ品の大牙と鉄とオブシディアンが落ちていた。

えーっと…うん、討伐成功！

「すばらしいですね」

「なぜだかダークスネークが少しかわいそうに思えてくるんだが…」

ナパークさんたちがいつの間にか背後に来てそんな感想を漏らした。え、やっぱり食欲に負けちゃダメですか？

「ミコト嬢、ダークスネークの肉をそぎ落としていたがどうするつもりなんだ？」

「食べます！」

即答した。

当たり前です、うなぎの蒲焼とは行かないかもしれないけどあの肉厚ならそれなりに食べ応えがあるはず！

リアマさんは顔を引きつらせて一歩後ろに下がり、ナパークさんは逆に一歩踏み出してきた。

うん、なぜだろう…今自分がナパークさんと同じ感性なのかと思ったら少し気分が落ち込んだ。

ま、まあ…なにはともあれご飯にしよう！

第二十話【おなかすいた】（後書き）

食欲は潜在能力を飛躍的にアップさせるのかもしれない。

ってかミコトはきつとまともな食事をこっちの世界にきてから取ってないので限界だったっばいです。

第二十一話【楽しいクッキング】（前書き）

きって焼くだけでも立派な料理です

第二十一話【楽しいクッキング】

さて、楽しいクッキングです！

先ほど剥ぎ取った黒蛇のお肉はおいしいとナパークさんが保障してくれた。

……信用できないのが痛いところだ。

調理用にとリアマさんが貸してくれた包丁……っていうか短剣に見えるんだけど気のせいだよな……で厚み1cmぐらいに切っていく。臭いをかいでみたけど特に臭みもないから大丈夫かな？

ちなみに、又タの体液はさすがに持ち歩いてないと思ったら持ってたよこの人……。

ナパークさん、あなたはいったい本当になんなんですか……。

又タの体液は何か透明な袋状のものに入っていたので器に袋ごと置いてみたら袋が消えて器が又タの体液で満たされた。

あの袋なに？！

体液は無臭だったけど味が心配だったので味見はもちろんした。

リアマさんが！

勇者だよ！リアマさんかつこいいよ！！

ちなみに、ものすつごくしょっぱいらしい。

リアマさんが平気そうだったから私も舐めてみたけど確かにものすつごくしょっぱかった。

なんだろう、塩分99%の塩水？いや、そのぐらいしょっぱかった。これに漬け込んだらさすがに塩辛いかなあ？

躊躇した結果一瞬浸して水気を切ってから焼くことにした。

ちなみにフライパンみたいなものはあるけどバターとか油系はないみたい。

この世界に料理事情っていったい…。

くつつかないといいなーと思って焼き始めたけどお肉から割と油が出てきたので心配は不要だった。

それにしてもこれ！この料理って感覚久しぶりだなあ。

うん、お肉の焼けるいいにおいがしてますますお腹がすいてくる！

「ふむ、香ばしいな」

「おいしそうですね」

ですよねっ！ですよねー！

あー！もつつ！よだれがつつ。

こんがり狐色になったところでお皿に乗つけてリアマさんが用意してくれたサラダとスープと並べる。

パンみたいなものはスープに浸して食べるように言われた。

ではいただきまーす！

「熱っ、うまっ！」

これ！この塩気だよー！

くうううっ胡椒もほしいけど今までの味気ない料理に比べたらもう最高！

「うまい」

「おいしいですね」

二人の評価も上々だし大成功だよね！

ちなみに、リアマさんのご用意してくれたスープは薄味じゃなかった。

塩気とかはあんまり感じないけど辛味がピリツとして美味しかった。白いスープだからポタージュだとおもったのに辛くて驚きのあまりむせったけどこれでわかったことがひとつ……。

ナパークさんの味覚がおかしい！！！！

リアマさんっ！なんでナパークさんに料理任せたんですか！

一緒に暮らしてるなら味音痴ぐらい把握してくださいよ！

「ナパークは味音痴なんじゃないんだ」

「え、味音痴ですよ」

「……こいつは味覚自体が大味すぎてな、そこらへんに生えてる草を食べても、一流調理人の作った料理を食べても美味しく感じるんだ」

「……それ、致命的な味音痴ですね」

「……あえて強くは反論しない」

つか味音痴だから！

かばうにも無理があるぐらいの味音痴だから！！

ちなみに、毒や身体に悪いもののみ不味いとか臭いと感じるらしい。どんな特殊体質なんですか…。

* * *

「ふう、満腹」

「うまかった」

「美味しかったですよ」

うん、ナパークさんの感想は当てにならないけどまあいいか。

さて、ボスも倒したしどのぐらいレベル上がってるかなあ？

食後のお茶：リアマさんが淹れてくれた：を飲みながら自分を鑑定してみてお茶を噴出しそうになった。

【ミコトⅡカガリ ヴァンパイア族 15歳 レベル14

属性：闇、雷、水

職業：棒術士レベル8、魔術士レベル7

控え職業：槍術士レベル6、拳術士レベル1、会計士レベル6、
製造士レベル1、医術士レベル1、調理師レベル1

所属：なし

所属ギルド：冒険者ギルド

所持奴隷：なし

装備：星灯の杖、回復の指輪、幸運のペンダント、鋼のブレスレ

ツト、月夜のブローチ、アイテムボックス腕輪型

常時スキル：暗視

任意スキル：鑑定、テレポート、闇魔術、水魔術、雷魔術、
槍技能、拳技能、棒技能、会計技能、製造技能、
医術技能、調理技能】

なんか調理士の職業が増えるし！
料理作ったらなれるのか調理士！！

ってかめっちゃレベル上がってる！！
14ってことはもう少して15ってことだね！
やばい…顔がにやけて止まらない。

「ミコト様、どうかなさいましたか？」
「えっ！いえ…えっと…ボスを倒せた実感がこう、今になってこみ上げてきたというか…」

「ああ、ボスは同レベル体の100倍といわれていますね」

100倍って…なにが？！

「レベルもだいぶ上がったんじゃないですか？ギルドカードを拝見しても？」

「あ、はい」

更新してから素直に渡す。

「14…」

「もう14ですか」

うんうん、もうすぐ15で修行完了ですよね！

「相変わらずすさまじい成長スピードだな」

「すばらしいですミコト様、では早速レベル15にするために行くことにしましょう」

……もうちょっとお茶休憩したかったです。

あきらめてますけどね。

「あ、魔術修行は終わりでもいいぞ」

まじですか！

「あれだけ完璧にコントロールできてるんだ、魔力切れにさえ気をつければなんとかなるだろう」

やった！空腹の火事場のバカ力最高！！

これでノルマ気にしなくてすむ！！

「では槍の修行ですね、まあ…ボスを100匹相当と考えて残り5匹は魔術なしで槍だけで戦闘を行ってください」

「はい」

そういえば、予備の槍は避雷針にしちゃって墨になっちゃってるんだった…。

アイテムボックスには槍は一本だけ、せっかく買ってもらったのに速攻で壊してごめんなさい。

第二十一話【楽しいクッキング】（後書き）

ミコトは新しい職業を会得しましたw

第二十二話【基本のおさらい】（前書き）

ナパークさんはすごいっていうお話

第二十二話【基本のおさらい】

槍術の修行はまずは基本のおさらいから始まる。

いやさ… あんだけ鬼なのにナパークさんはやっぱり真面目だと思うのがこの瞬間。

基本が出来なければいつか歪むからってこの数日で耳たこなほど聞かされた。

だからといって、素振りではなく実践なんだけどねっ！

「実戦に勝る鍛錬はありませんよ」

さらっと言ってくれてますけど槍だけで黄蛇とガチバトルは魔術でより大変なんですが…。

距離的な問題と攻撃を食らわないように逃げるのが大変なんですけど…！！

「はあっ… はあ…」

槍、効率悪くない？

昔の人は槍でバツバツサしてたらしいけど…なぜ？

奥義？奥義が必要な？！

いやっ無理だろ！

払っただけで何十人もぶっ飛ぶ風圧だせないって！

「槍って難しい…」

「まあ、コツがありますからね。リーチがある分狭い場所では使いにくいですし」

くっ…！

三国な人たちに憧れて槍にした私がばかなのかっ！

「しかし…、使いこなせれば便利ですよ」

使いこなせませんっ！

「まあ、最初からナパークのようには無理だ」

いや、それはわかります。

ナパークさん強すぎだし、剣術士だったのに槍使ってもアホ強いし。

「慣れますよ」

慣れるまでいったいどんだけかかるんですか？

ハルバートを握り直すと先端を見つめる。

払うよりも突くに向いた先端だよな。

ロングノースもだったけどこういので払うには、やっぱり腕力と風圧が必要な気がする。

もしくは貫通力を高めて数匹一気に貫くか…。

いや、刺してる間に背後に回られたらやばそう。

くううっ！

槍ってやっぱり難しい！！

「技の見本でも見せたらどうだ？」

「ここですか？」

「ああ」

「そうですね…」

ナパークさんは少し考えるように私を見て軽く息を吐いた。

「いいでしょう」

アイテムボックスから槍を取り出して右手に持つ。

「巣穴は？」

「左だ」

リアマさんの案内で左の道を進むと開けた空間があった。
そこには5匹の黄蛇…。

わー、いままで団体で見たことなかったけど怖いってか、キシヨイ。
黄色いものがうねうねと…。

「少ないですね」

これで？！

「繁殖期ではないからな」

蛇系のモンスターはあまり群れないらしい。
いいことだ!!

「では、参ります。ミコト様は下がっててください」

言われてリアマさんの斜め後ろまで下がる。

右手に槍を持って黄蛇と向き合うナパークさんはなんだかいつもと
雰囲気違った。

私に教えてくれるときも少し感じてたけど、もっとこう…研ぎ澄
まされたような…。

「疾風・爆…」

呟いてナパークさんが動いた。

「え……」

早いとか、強いとかそんなものじゃなく。

「きれい…」

無駄のない動き、正確に黄蛇を貫き、払い、そして叩き伏せる。

一撃一撃に重みがあつて、槍の先端が空気を巻き込んで敵に向かっ
ていく。

衝撃波、だろうか？

透明な空気の圧力が点までさらに圧縮されて……貫かれた瞬間爆発
する。

まるで演武を見ている気になる。

あつという間だ…、5匹の蛇はあつと言う間全滅させられていた。すごい、としか言えない。

「あれが槍の初歩的な技だ」

「あれが?!」

どうみても初歩じゃないよね!?

「まあ、ナパークが使ったからあそこまでの威力だが、普通はもっと弱い」

そ、そうなんだ…。

「ナパークは技能の天才だからな」

「技能の天才、ですか?」

「ああ、あいつは常人の大体4倍のスピードで技能を高めていく」

え、それなんていうチート…。

「もつとも武術士に近いといわれ、怪我で引退しなければ確実になつていたな」

「怪我…」

治癒魔術があるのに後遺症が残るような怪我を?でも、今もめっちゃ強いよね?

「利き腕…左腕がちぎれる寸前までいつてな、治癒魔術を全力でかけたがやはりかつてのようには動かないらしい」

「そうですか…」

千切れかけても見た目普通まで戻ってる時点ですごい。
元の世界の最新医療だってそこまでいったら義手にせざる得ないだろうに…。

元のようにっていうのは、神経がうまく繋がらなかったのか筋が切断されたせいで弱くなったか…、いやもしかしたら骨の接続部分になにかうまくいかないのかも……。

って、医者じゃないんだからわかるわけないか。

それにしても、利き腕がうまく動かないのにこの強さ…。
最盛期はいつたいどんだけだったんだろう。

「いかがでしたか？」

先程までの研ぎ澄まされた雰囲気からいつもの柔らかいものに戻っている。

「すごかったです」

こんな感想しかいえなくて申し訳ないけど、本当にそれしか言えないぐらいにすごかった。

いつか、私もあんなふうに使えるかな。

「そうですか、では特訓しましょう」

……………え？

「大丈夫、ミコト様ならすぐに会得できますよ」

………は？

「ああ、そうと決まれば早速実戦しないと、リアマ」

「こつちの通路にいけば一匹いるな」

「では参りましょう。私の技の動きは見ていましたね？あれを模範に自分なりにやってみてください」

………ちよつ！

「コツは尖端に力を込めてそれを相手に刺す感覚です。私は空気が集まる感覚で行っています」

全くわかりません！

「あとは…そうですね、きれいに刺せばきれいに抜けるので刺す角度と場所を注意する感じですね」

簡単にいってくれるよこの人！！

リアマさんに助けを求めるように見れば横に首を振られた。

「こいつは基本はちゃんと教えられるが技は感覚でしか教えられないんだ」

なにその天才みたいなの！

………って、そういえば天才なのか。

………っじゃなくて！なんでいきなりこうなるの？！

私？私が変なこと考えたから悪いの？！

「まあ、習得できなくてもレベルは上がるだろうから」

え、まさか……またあれですか？

「諦めてくれ」

やっぱりかあああああ！！

第二十二話【基本のおさらい】（後書き）

元々右でも左でも武器は扱えてましたし、今も左でも扱えることは扱えます。

というか、現在でも左だけでもそこら辺の低レベル冒険者にはそうそう負けない。

第二十三話「普通はできない」(前書き)

先入観は発想力の妨げになるとおもうけど、それがあるからこそその発展もある。

みたいはお話です。

第二十三話「普通はできない」

感覚で技が使えたら苦勞はしない。

「そうではなく、もっと先端に力を込める感じで」

やってますけどできません。

てか、そのアドバイスは5回目ですよナパークさん。

そもそも一日やそこらで出来るようなものじゃないよねえ…。

「ミコト様なら出来ます」

その根拠を聞かせてください、絶対言葉につまるよね!!
しかし…尖端に力を込めると言われても……。

「うう……」

「そうではなく、集める感じです」

空気なんか集めたことないんでわかりません!!

あ、いや…ビニールに空気溜めて口結んで叩いて破裂させたことはあるけど…。

あれは収まる器があつてのものだし…。

それになにより、意識して力を込めると闇魔術が発動しそうなんです!!

これってしばらく魔術修行してたせいかなあ？
しかし、どうしたものか…。

7匹ほど倒してみても技はどうしても習得できないでいる。
ナパークさんのため息が精神的なダメージでぐさぐさくる。

「もう少しなんですけどね」

「そうなんですか？」

とてもそうは思えません！

「ええ、集まりかけるとすぐにそれを解いてしまっているでしょう？
あれをそのまま維持して凝縮しておけばいいんですよ」

いや、私が集めちゃったの闇の魔術だし。

「魔術を使えるのですから力を込めるのは簡単だと思うのですが、
感覚の問題ですし」

その魔術に慣れたせいで空気を集めるのがうまくいってないんです。

「でも、空気を集めるなんて…」

「簡単ですよ？」

それはあなただけだと思います！

「そもそも、ミコト様は風属性はお持ちではないのですから別に空
気を集めることにこだわらなくてもいいのですよ？」

は？

「闇・雷・水の3属性なのですから、そのいずれかでもいいのでは？」

え？

「技って、魔術みたいなものなんですか？」

「属性の力を使うというのでは似ているような気がしますね、技の発動には魔力の消費がありますし」

……それをもっと早くいつてください。

「魔術は魔力を代償に属性の力で物質もしくは存在を作り出すもので、技は魔力を消費して属性の力を武器に纏わせるもの……ってことですか」

「………」

え？なんで沈黙？！

「なるほど」

「そっかいわれれば……」

ええ？！

なにその、今初めて気がつきました！見たいな顔っ。

ちよっと思えばわかるじゃん！

ってか技って魔術と似たようなもんだって言うなら普通そう考えるよね？！

「まあ、その研究は後程するとして……」

え、研究するの？！

「ともあれ、あと40刻ほどしか残されていませんのでここで休憩する時間はないですね」

つまり、ちゃっちゃか技習得してレベル上げろってことですね。

そして、まあ…あれだ……。

技の習得はできた、あっさりと。

今まで出来なかったのはナパークさんの「空気を集める感じ」というのにこだわってたせいらしい。

風の属性を持ってない私が風魔術を使えないように空気（つまり風）を応用したものが使えるわけ無かった。

闇でも平気と思った瞬間使えるようになったのがその証拠。

ただ、風と闇の差なのか私の技はナパークさんのものとは少し違うものになってしまった。

「闇技・吸あんぎ きゅう」

呟いて槍を繰り出す。

尖端に集まり刃を覆っていく闇が黄蛇に吸い込まれると同時に私の魔力と体力が微量ながら回復していくのを感じる。

思わぬところで吸収技を会得してしまった。
魔術で…、とっていたのだがまさか槍術でできるとは…。

吸収されてしまった黄蛇はまるで糸の切れた人形のように崩れ落ちていく。

一撃で倒せるようになったのもすごいが、吸収機能が何よりもすごいと思う。

これで魔力切れ寸前になってもこの技を使えば楽に戦える。
注意すべきはこの技を使えなくなるまで魔術を放ったら多少回復するまで待たなければいけないということか。

ちなみに、水の属性で技を使うと「水^{すい}技^ぎ・^{かつ}渴」で対象の体内の水分が吸い取られてミイラみたくなる。

雷属性は「雷^{らい}技^ぎ・^ひ痺」で体内感電みたくなってしまつらしい。
どれもえぐい…。

ま、まあ……技も習得できたしいつか。

「初級技じゃないだろ、あれ」

「さすがミコト様、最初から上級技とは。しかし、その分消費魔力が…いえ、吸収することで問題解決ですね」

「いや、そういう問題ではなく…そもそも相手の体力や魔力を吸収する技なんてそうそうできないぞ」

「え、できますよ？風技・生命吸収とか」

「お前は出来ても普通はできない」

リアマさんはなにか頭を抱え初めてぶつぶつい始めてしまった。
この規格外師弟が、とか常識が足りてない二人がとか聞こえる。
いやいや、私ちゃんと10歳の子供が持つてる位の常識はあります
から！

それがたとえ子供の夢とか知識足らずで大人の世界では非常識とか
でもまあ、いいんじゃないかと……… 思いたい。
でも、私が一般常識足りてないってのはないと思うんだけど、食事
とかのことを考えると足りてないのかなあ？

いやいや、食材のことを詳しく知らなくてももしかたないよね。
基本的な食べ物はしってるんだし。

塩分にしたってよくよく思えばこの世界にだって体液でなくても塩
に該当するものはあった。

辛味もあるし甘味だってある、胡椒に値するもにはちょっと思い付
かないけど酢てきなものもある。

ただ、全体的にそれのものがモンスターのドロップなだけで
…、なおかつそれなりに高額でなかなか手に入らないという…。

したがってこの世界の料理は全体的に薄味。

リアマさんの料理がしっかり味付けされてたのは私に会わせて辛味
材料を多目にいれてくれたかららしい。

調理士の中には新たな食材を求めて下手な冒険者よりも強い人がい
るといったし、食事情はどこの世界でも必死だよな。

第二十三話「普通はできない」(後書き)

そろそろダンジョンでの修行も終わりです。
長かった……。

まだ従者とか相手とかいろいろ出したいキャラだせてないのにもう
23話(呆然)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7095y/>

転生したけど引きこもります。

2011年12月15日23時05分発行